

飛 渡 遺 跡
島 廻 遺 跡
白 木 原 遺 跡

県営特殊農地保全整備事業（横尾下・田之浦）
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1988年3月
鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会



飛渡遺跡第5トレンチ拡張区全景



飛渡遺跡出土土器

序 文

本町は埋蔵文化財包蔵地が多く、前川、安楽川の流域を中心に約170ヶ所の周知の遺跡が知られております。

近年、宅地開発や農業基盤整備事業の増加に伴い、これらの遺跡の緊急確認調査もまた急増しています。

今回調査しました飛渡、鳥廻、白木原の各遺跡の確認調査も県営特殊農地保全整備事業の実施に先立って行なわれたものです。

ここに、その調査結果を報告書として刊行いたしますが、この資料が歴史解明の一助となり、文化財の保護と学術研究のために広く活用されれば幸いです。

発刊にあたり発掘を担当された調査員はじめ指導者、作業協力者の皆様、また調査に御協力を頂きました土地所有者、並びに関係各位に対し、心よりお礼を申し上げます。

昭和63年3月

志布志町教育委員会

目 次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	2
第2章 遺跡の位置・環境と周辺遺跡	3
第1節 遺跡の位置・環境	3
第2節 横尾下地区の周辺遺跡	4
第3節 田之浦地区の周辺遺跡	6
第3章 横尾下地区の調査	8
第1節 調査の概要	8
第2節 標準土層	8
第3節 飛渡遺跡の調査	11
1 飛渡遺跡の概要	11
2 第5トレンチ	11
3 第9トレンチ	11
4 第5・9トレンチ拡張区	12
第4節 島廻遺跡の調査	29
1 遺跡の概要	29
2 第18トレンチ	29
3 第19トレンチ	30
4 第20トレンチ	30
5 第23トレンチ	31
第5節 小結	33
第4章 田之浦地区の調査	34
第1節 調査の概要	34
第2節 標準土層	34
第3節 白木原遺跡の調査	36
第4節 小結	38
あとがきにかえて	38

例 言

1. 本書は、鹿児島県農政部(大隅耕地事務所)が行う特殊農地保全整備事業にさきだって行われた、埋蔵文化財確認調査の報告書である。
2. 調査は県農政部からの委託を受けて、志布志町教育委員会が実施した。なお、調査の実施にあたっては鹿児島県教育庁文化課の指導・協力を得た。
3. 本書で用いた高度は、県農政部の作成した地形図に基づく海拔高度である。
4. 遺物番号については、土器と石器とにわけて各々一連番号を付した。
5. 本書の編集・執筆は、米元史郎・富田逸郎が行った。

挿 図 目 次

第1図	横尾下地区の周辺遺跡	5
第2図	田之浦地区の周辺遺跡	7
第3図	横尾下地区の周辺地形とトレンチ配置図	9
第4図	飛渡遺跡第5トレンチ・遺物出土状況と 土層図	11
第5図	〃 グリッド設定図・発掘区地形	13 14
第6図	〃 遺物出土状況	15 16
第7図	〃 東西・南北土層図	17
第8図	〃 出土土器(1)	18
第9図	〃 土器1・2出土状況	18
第10図	〃 出土土器(2)	19
第11図	〃 出土土器(3)	20
第12図	〃 出土土器(4)	21
第13図	〃 出土土器(5)	22
第14図	〃 出土土器(6)	23
第15図	〃 出土土器(7)	24
第16図	〃 出土土器(8)	25
第17図	〃 出土石器(1)	27
第18図	〃 出土土器(2)	28
第19図	鳥廻遺跡第18トレンチ 遺物出土状況・ 土層図	29
第20図	〃 第18トレンチ 集石出土状況	29
第21図	〃 第19トレンチ 遺物出土状況・ 土層図	30
第22図	〃 第20トレンチ 遺物出土状況・ 土層図	31
第23図	〃 第23トレンチ 遺物出土状況・ 土層図	31
第24図	〃 各トレンチ出土土器	32
第25図	田之浦地区の周辺地形とトレンチ配置図	35
第26図	白木原遺跡第1トレンチ 遺物出 土状況・土層図	36
第27図	〃 第1トレンチ出土石鏃	36
第28図	〃 出土土器	37

図 版 目 次

図版1	飛渡遺跡第5トレンチ遺跡出土状況 〃 〃 拡張区全景(北から)	39
図版2	〃 〃 〃 〃 (南から) 〃 〃 〃 発掘風景(北東から)	40
図版3	〃 遺物出土状態(土器1・2)	41
図版4	〃 出土遺物	42
図版5	〃 〃	43
図版6	〃 〃	44
図版7	〃 〃	45
図版8	〃 〃	46
図版9	〃 〃	47
図版10	〃 〃	48
図版11	〃 〃	49
図版12	土層断面図及び遺物出土状況	50
図版13	鳥廻遺跡土層断面	51
図版14	〃 遺物出土状況	52
図版15	〃 出土土器 白木原遺跡 〃	53
図版16	〃 発掘状況 〃 遺物出土状況	54

第1章 調査の経過

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県は曾於郡志布志町横尾下・田之浦地区において、県営特殊農地保全整備事業（横尾下・田之浦）地区を計画したところ、当該地区内に鳥廻遺跡・白木原遺跡の周知の遺跡が存在していることが判明した。

そこで鹿児島県農政部農地建設課、大隅耕地事務所、鹿児島県教育庁文化課、志布志町耕地課と協議を重ねた結果、埋蔵文化財の保護・活用と、事業の調整を図るため、昭和62年度に、確認調査を実施することとなった。尚、当該調査に係る費用については、工事計画決定時、すでに文化庁の補助事業採択申請後であったため、上記関係機関の協議により、大隅耕地事務所が志布志町教育委員会へ委託事業として実施することに決定した。

発掘調査は志布志町教育委員会が主体者となり、調査及び調査報告書は鹿児島県教育委員会文化課に依頼し、文化課職員を主任とし、本町担当職員を補助員とした。

発掘調査は昭和62年10月26日から12月12日まで実施し、その後、県文化課重富収蔵庫で報告書作成作業を行った。

尚、発掘調査前は遺跡名を鳥廻・白木原遺跡としたが、調査に入り、当初、狭長な一つの遺跡とみられていた鳥廻遺跡の出土分布が二地区に分れ、しかも遺跡環境、出土遺物、並びに字名の違い等が確認されたので、新たに飛渡遺跡と命名した。

第2節 調査の組織

調査主体者 志布志町教育委員会

調査責任者	志布志町教育委員会	教育長	野 間 隆
		社会教育課長	山 角 利 行 (～S 62・9)
		社会教育課長	那加野 久 廣 (S 62・10～)
		社会教育課参事	川 崎 卓 男 (S 62・10～)
		兼文化体育係長	
		社会教育課長補佐	那加野 久 廣 (～S 62・9)
		兼文化体育係長	
		主 査	畦 地 正 昭
		主 事	米 元 史 郎
		主 事	荒 平 安 次
		主 事	谷 口 隆 博
		主 事	杉 田 聖 次

調査担当者 鹿児島県教育委員会 文化財研究員 富田 逸 郎
志布志町教育委員会 主 事 米 元 史 郎

尚、調査企画において、県教育庁文化課長吉井浩一、同課長補佐川畑栄造、同主幹森田齊、同主任文化財研究員兼埋蔵文化財係長立園多賀生、企画助成係長浜松巖の各氏の指導助言を得た。

又、県文化財保護審議会委員河口貞徳氏には重富収蔵庫における整理作業中の遺物指導について多大な御教示を受けた他、現地発掘調査では志布志町文化財保護審議会委員瀬戸口望氏の助言を得た。

第3節 調査の経過（日誌抄）

10月26日(月)～同月30日(金)

飛渡遺跡確認調査。第1～12トレンチを設定後、第1～9トレンチ掘下げ。第5トレンチのみに遺物の出土あり。第1～4、6～7トレンチは終了。

11月2日(月)～同月6日(金)

飛渡遺跡確認調査。第8～12トレンチを掘下げ。開墾・耕作により削平著しく、赤ホヤ層より上層の遺存状態不良。第5トレンチの南北に1m幅に長くトレンチを延ばす。

11月9日(月)～同月13日(金)

飛渡遺跡は第5トレンチを残し終了。島廻遺跡の確認にはいる。第13～21トレンチを設定し第13～20トレンチを掘下げる。飛渡遺跡の第5トレンチ写真実測を行い終了。

11月16日(月)～同月20日(金)

島廻遺跡確認調査。第22～26トレンチ設定。第18～26トレンチ掘下げ。第18～2023トレンチで縄文時代早期の包含層確認。写真撮影平板実測を行い終了。飛渡遺跡の第5トレンチ拡張に着手。

11月23日(月)～同月27日(金)

飛渡遺跡第5トレンチを拡張し、記録保存を図る。バックホーにより表土剥ぎの後、包含層の掘り下げ。弥生時代、縄文時代晩期の土器・石器の遺物の出土を見る。最高位のグリッドでは、包含層がほとんど残っていない。谷状の部分に流れ込んだ様相を呈する。

11月30日(月)～12月4日(金)

飛渡遺跡の包含層を掘り下げ。写真撮影・平板実測等を行う。遺構検出の為に包含層を精査するも遺構は検出されなかった。白木原遺跡の確認調査も平行して行う。第1～15トレンチを設定し、順次掘下げ。ここも開墾・耕作による削平が著しい。

12月7日(月)～12月12日(土)

飛渡遺跡の実測を行い、終了。白木原遺跡の確認調査。第1トレンチから縄文時代早期の遺物出土。他のトレンチはシラス層上面まで掘り下げるも遺物遺構の出土なし。第1トレンチの写真撮影・平板実測を行い終了。最終日、諸道具の搬出・取納を行い現場作業すべて終了。

第2章 遺跡の位置・ 環境と周辺遺跡

第2章 遺跡の位置・環境と周辺遺跡

第1節 遺跡の位置・環境

本町は鹿児島県の東端部で、志布志湾の湾奥部に位置し、海岸線は東西に約10km、内陸部に向って約24kmで、南北に細長く伸びる釣鐘形の形状をなしている。

北東から東側へは宮崎県都城市及び串間市と接して県境をなし、北西から西へは末吉町、松山町、有明町とそれぞれ接している。

南面する海岸線は、ほぼ中央に位置する市街地を挟んで、西側は砂浜海岸が続くのに比べ、東側は日南層群で構成される山稜が海までせまり岩礁海岸を形成している。尚、市街地は、比高40m程のシラス台地の海食崖下に発達した古期砂丘上に立地しており、これは約6,000年前の縄文海進の名残りと考えられる。

内陸部の地形は、北部から東部にかけての山稜地帯は、主に新生代古第三期の地層と考えられている日南層群よりなる南那珂山系の西端域となり、これより西へ広がる広大なシラス台地（曾於丘陵地）には、この山系より派生する残丘状山地が北東より南西方向に、散発的に、次第に小起伏となって延びている。シラス台地は並行して南流する中小の河川の活発な侵食作用によって深い谷で分断され、さらにその支流によって樹枝状に広がる谷頭侵食で細かく刻み込まれて、大小幾多の台地が形成され、谷底の低地とは急傾斜面や崖によって区切られている。

町内を流れる河川は西側に延長24kmの安楽川が、東側を延長15kmの前川がそれぞれ南流しており、他に北東山間部の四浦地区には大矢取川が宮崎県串間市を経て志布志湾へ注ぎ込んでいる。又、これらの河川の中流域から下流域にかけては各所に大小の河岸段丘や谷底平野が形成されている。

このような地形のため、町内に分布する約170箇所（箇所）の埋蔵文化財遺跡の多くは、山稜に付随するそれぞれの山麓台地基部、あるいはその辺縁部に立地している。今回発掘対象となった三遺跡も、鳥廻遺跡は横尾下台地の西側辺縁部に立地し、飛渡遺跡は、さらにその台地先端部が一部侵食谷によって狭長な半島状に延びた尾根部の、東向き緩斜面上端に立地している。さらに白木原遺跡は、安楽川上流部の小規模な東向き山麓台地基部に立地している。

以上、志布志町の自然環境等を概観したが、この豊かな自然の恩恵を受けて、古代より連綿とした人々の営みが、繰り広げられていたことが偲ばれるものである。

第2節 横尾下地区の周辺遺跡

島廻・飛渡遺跡の位置する横尾下地区は、前川下流域の西部に位置している。この前川の下流域には、第1図に示す通り前川本流及び支流によって樹枝状に侵食谷が発達し、これによって大小に分断されたシラス台地の辺縁部に、数多くの遺跡が立地している。

この中で、今回横尾下地区農地基盤整備事業によって確認調査の対象となった飛渡遺跡は、今回の調査直前になって地元農家の情報によって確認された遺跡であり、小字名から飛渡遺跡と命名したものである。調査前に入手した情報では、以前に石斧、土器片等の出土があったようである。

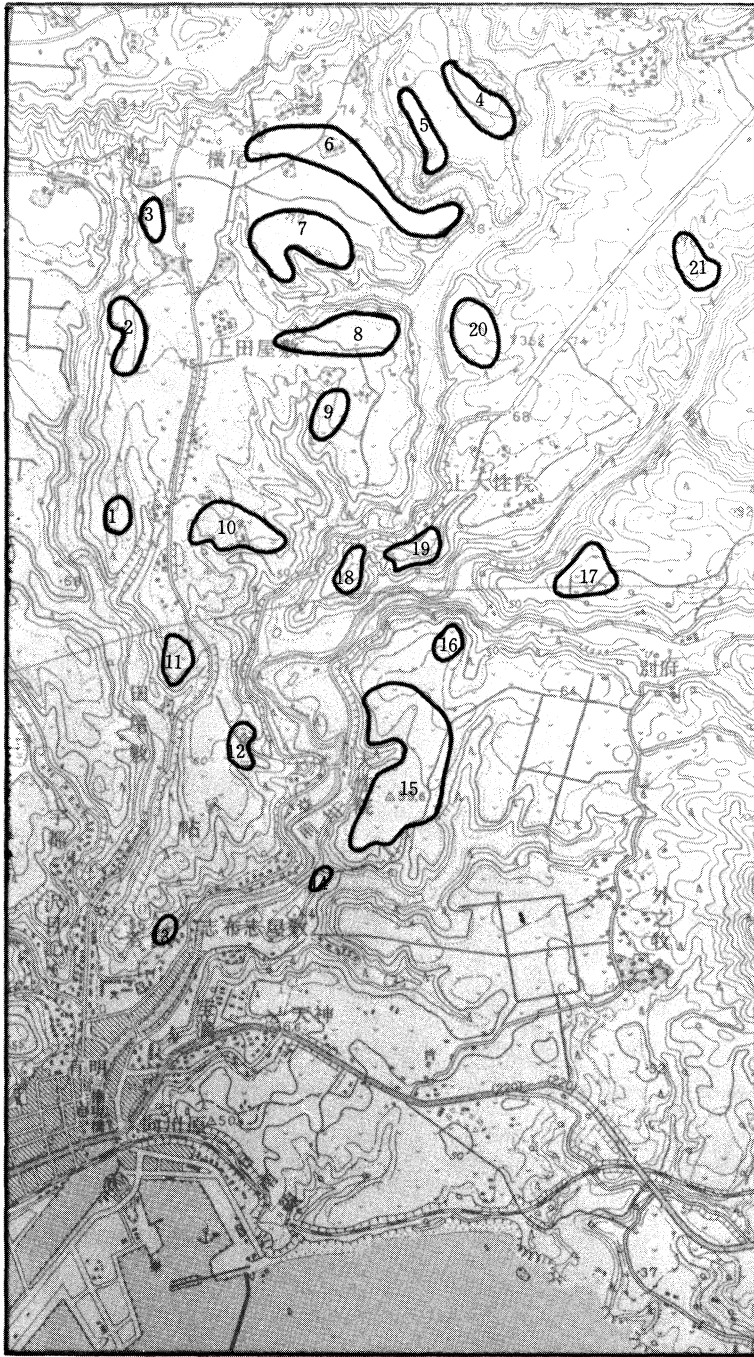
2の島廻遺跡は弥生土器を出土する遺跡として以前から知られていたが、今回の調査では、表面採集によって弥生土器の底部他、若干の土器片を得られただけで、包含層の把握は出来なかった。これは本町の縄文時代晩期以後の遺跡でよくみられることであるが、畑地表面の遺物散布は濃厚に見られるものの、その遺物包含層はすでに耕作によって消失してしまっているという例にもれないものと思われる。尚、今回の調査によって新たに現地表面下約1mに、縄文時代早期の包含層が確認され複合遺跡であることが判明した。

この他、周辺の遺跡で過去に発掘調査を実施し、その性格が解明されている四遺跡について若干説明をすると、まず13の小淵遺跡であるが、この辺りは中世時代に築城された志布志内城本丸に通じる小淵口にあたり、前川との比高差は約14mである。昭和42年8月に調査された結果、第1層に山城築造当時のものと考えられる川原石を敷きつめた側溝や、階段状に土留め石を並べた通路跡等が発見され、以下、市来式、草野式、指宿式、岩崎上層式、下層式等の土器が層位的に出土し、又、多量の石錘をはじめとする石器類も検出されている。

次に14の野久尾遺跡であるが、この遺跡は石踊台地先端部の小丘陵の鞍部に立地しており、これは今回発掘した飛渡遺跡と立地条件が似かよっている。昭和52年、53年の発掘調査で、轟式土器を主体として、撚糸文、春日式、指宿式等の土器類の他、有孔石製品や石匙等の石器類も出土している。詳細については志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書「野久尾遺跡」に報告されている。

15の石踊遺跡は別府石踊台地の農地基盤整備事業に伴って、その舗装道路部分が昭和52年3月、約2400㎡にわたって発掘調査され、吉田式、石坂式、塞之神式、蓆目文、網目文等の土器や集石遺構等が検出されている。詳細は志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書「石踊遺跡」に報告されている。

16の山之上遺跡は、石踊遺跡と同一台地北辺部に立地し、昭和42年3月志布志町誌上巻編集の一環事業として発掘調査されたもので、第2層から第3層に塞之神式、石坂式等の土器類が出土し、第4層下部からは石核も検出され、層位的出土が見られる複合遺跡であることが確認されている。



番号	遺跡名	時代
1	飛渡	縄・弥
2	鳥廻	縄・弥
3	稲荷免	弥生
4	井手元	縄文
5	中原	縄文
6	上牧	縄文
7	白木牟田	縄・弥
8	下牧	縄・弥
9	上田屋敷	弥生
10	堂迫	縄・弥
11	油田	縄・弥
12	西中野	縄文
13	小測	縄文
14	野久尾	縄文
15	石踊	縄文
16	山之上	縄文
17	下田	縄文
18	坂之上	縄文
19	八反田	縄・弥
20	下佐野原	縄文
21	下迫	縄文

第1図 横尾下地区の周辺遺跡

第3節 田之浦地区の周辺遺跡

志布志町内の遺跡の大半は、前川、安楽川の両河川沿いに集中して立地している。しかし、安楽川沿いの遺跡については、上流域、中流域、下流域とそれぞれその立地形態に相違がみられるようである。

まず下流域では、広い平坦面を有する高位のシラス台地では、谷底の河川まで比高差も大きく、距離的にも遠くなることから、台地辺縁部の遺跡立地は見られない。ここでは、川に沿って発達している中位、あるいは低位の河岸段丘の辺縁部に立地している。

次に中流域であるが、ここでは中位段丘の発達が弱いため、遺跡は、高位の台地辺縁部、もしくは山稜に付随した中規模の、傾斜をもった台地の辺縁部に集中している。

しかし、上流域になると、必ずしも台地辺縁部に立地しているとはいえない。この地域では山間の台地と、安楽川の川底との比高差が70m～80mに及び、しかも切り立った急傾斜面をもって区切られているため、他の地域のように台地辺縁部でなく、むしろ山稜と台地の基部付近に立地している例が見られる。今回発掘対象となった白木原遺跡をはじめ、北隣の倉野、板山遺跡や南隣する白木八重遺跡等がそうである。これらの遺跡では生活に不可欠な水源を、遠くはなれた本流の深い谷底に求めるのではなく、隣接する台地間に山稜まで切り込んで谷頭の、湧水に求めていたものと思慮される。

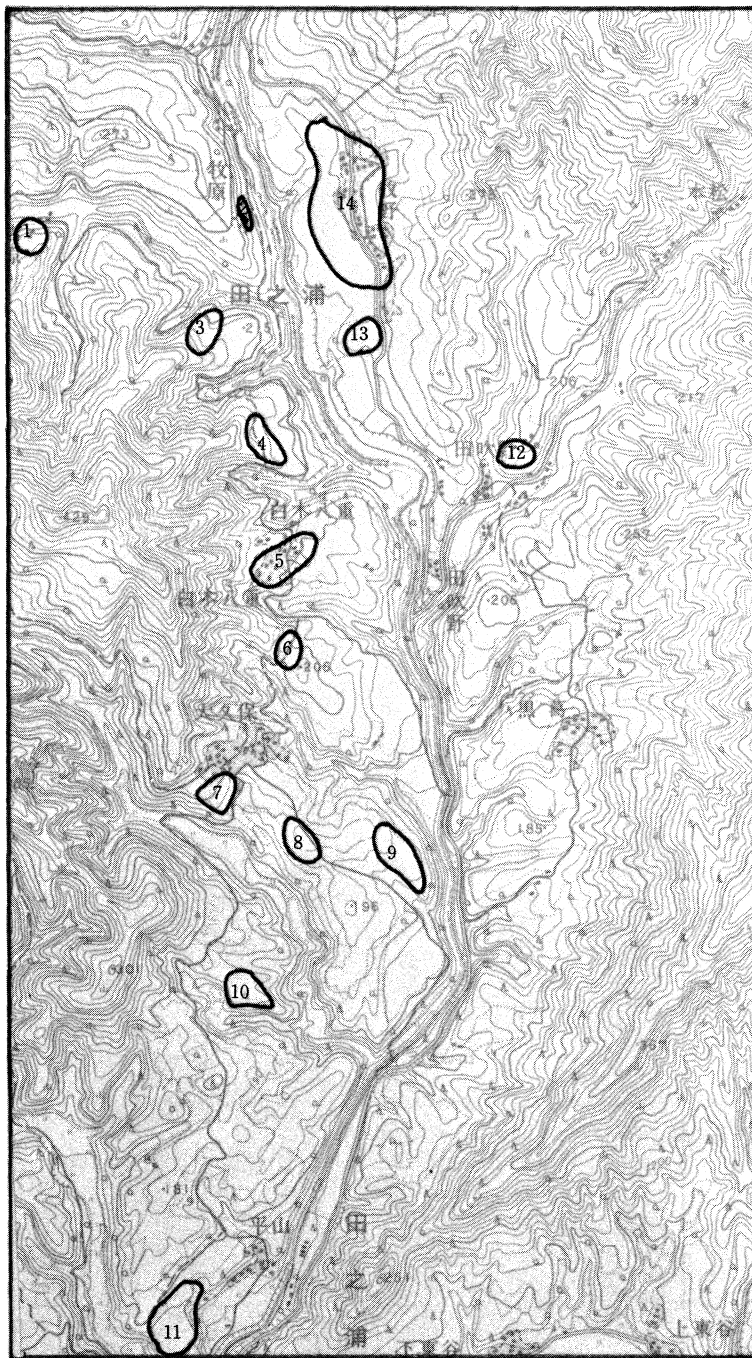
第1図に揚げた安楽川上流の各々の遺跡について若干の説明を行なうと、過去に発掘調査を行った例はなく、分布調査によって表面採集された遺物からその性格を知るしかないが、全体に縄文時代早期の遺跡が多いようである。

遺跡番号の②の牧原遺跡は町内最北に位置する遺跡で、具体的内容については不明な点も多いが、宅地裏山を開墾した際に、地表面下1mのところにも多量の土器片が出土し、住居跡と考えられる遺構も発見されたといわれ、出土土器は甕式土器となっている。

③の倉野遺跡、④の板山遺跡は個人の畑地造成で発見された遺跡で、倉野遺跡は現在植林地となっており、出土遺物は、山形押型文、網目文、吉田式、前平式、甕式、塞之神A式、条痕文土器、黒耀石片と多彩である。又、板山遺跡の出土遺物は楕円押型文土器となっている。両遺跡とも町内有数の高所遺跡であり、これらについては、本町在住の考古学研究者瀬戸口望氏により、鹿児島考古第8号に“採集による押型文土器について”と題して発表されている。

⑥の白木八重遺跡も白木八重台地基部に位置し、同所を峠状に横断する道路の壁面にも多くの石片が含まれており、部分的には畑の耕作面に包含層が露呈している箇所もみられる。出土遺物は楕円押型文土器や黒耀石片が多い。

⑧の大長野B遺跡、⑨の大長野C遺跡は、前述の遺跡と違なり、台地中央部或いは先端部に立地しており、今後、この一帯に大規模な農地基盤整備事業の計画があることから、これらの遺跡についても、近い将来発掘調査が行われ、遺跡の立地と地理的条件について多くの示唆を得られるかもしれない。



番号	遺跡名	時代
1	吉原	縄文
2	牧原	縄文
3	倉野	縄文
4	板山	縄文
5	白木原	縄文
6	白木八重	縄文
7	大長野A	縄文
8	大長野B	縄文
9	大長野C	縄文
10	平山	縄・弥
11	宮谷口	縄文
12	田吹野	縄文
13	内門	縄文
14	牧野	縄文

第2図 田之浦地区の周辺遺跡

第3章 横尾下地区の調査

第3章 横尾下地区の調査

第1節 調査の概要

特殊農地保全整備事業横尾下地区内においては、当初鳥廻遺跡だけが周知されており、この確認調査は鳥廻遺跡の拡がり等を把握する目的で企画されたものであった。その拡がりを目指す中で、鳥廻遺跡から若干距離を持ち、かつ時期の異なる遺跡の存在が確認された。そこでこの遺跡は鳥廻遺跡とは別個のものとして捉え、飛渡遺跡として報告することとなった。すなわち、一事業地区内で二つの遺跡の確認調査となったのである。

さて、この横尾下地区は前川流域の各所にある台地と同様に、ゆるやかな起伏を持ちながら浅い谷が各所に走り、周囲は前川の支流による深い谷で隔てられためぐまれた立地条件にある。

飛渡遺跡は台地が舌状にのびて、ゆるやかな傾斜をもつ尾根の頂部の平坦面及び緩斜面上に位置する。鳥廻遺跡は台地奥部の西に走る浅い谷の谷頭兩岸である。

調査は2m×3m、2m×2mのトレンチを26本設定して行った。トレンチの位置は第3図に示すとおりであるが、これは工事の切土部分で地表面に遺物の散布が見られる箇所等に設けたものである。

この26本のトレンチのうち、第5・9トレンチと第18～20・23トレンチで遺物包含層が確認された。前者が飛渡遺跡、後者が鳥廻遺跡である。

なお、飛渡遺跡は先に述べたように尾根の頂部にあり、工事の設計変更はどうしても無理であることから、第5・9トレンチを拡張して記録保存の措置がとられた。この件は横尾下地区全体の確認調査が終了次第ただちに持たれた県農政部・県教育庁文化課・志布志町教委の協議によってとられた措置である。

一方鳥廻遺跡は若干の設計変更によって、包含層は保護できるとのことであり、工事の設計変更により現状保存となった。

第2節 土層

○ 飛渡遺跡

I 層:耕作土

II 層:黒色砂壤土

III a層:暗燈褐色粘質土(アカホヤ層に腐食質のまじったものか?)

III b層:燈褐色粘質土(白色パミスを混ぜる。アカホヤ層)

III c層:黄燈色パミス(アカホヤのパミス)

IV 層:黒色腐食土層

V 層:明茶褐色シルト(サツマ層)

○ 鳥廻遺跡

I 層:耕作土

II 層:黒色埴壤土(やや粘質)

III 層:黒褐色埴壤土(軽石の混ざり具合でさらに3層に細分される)

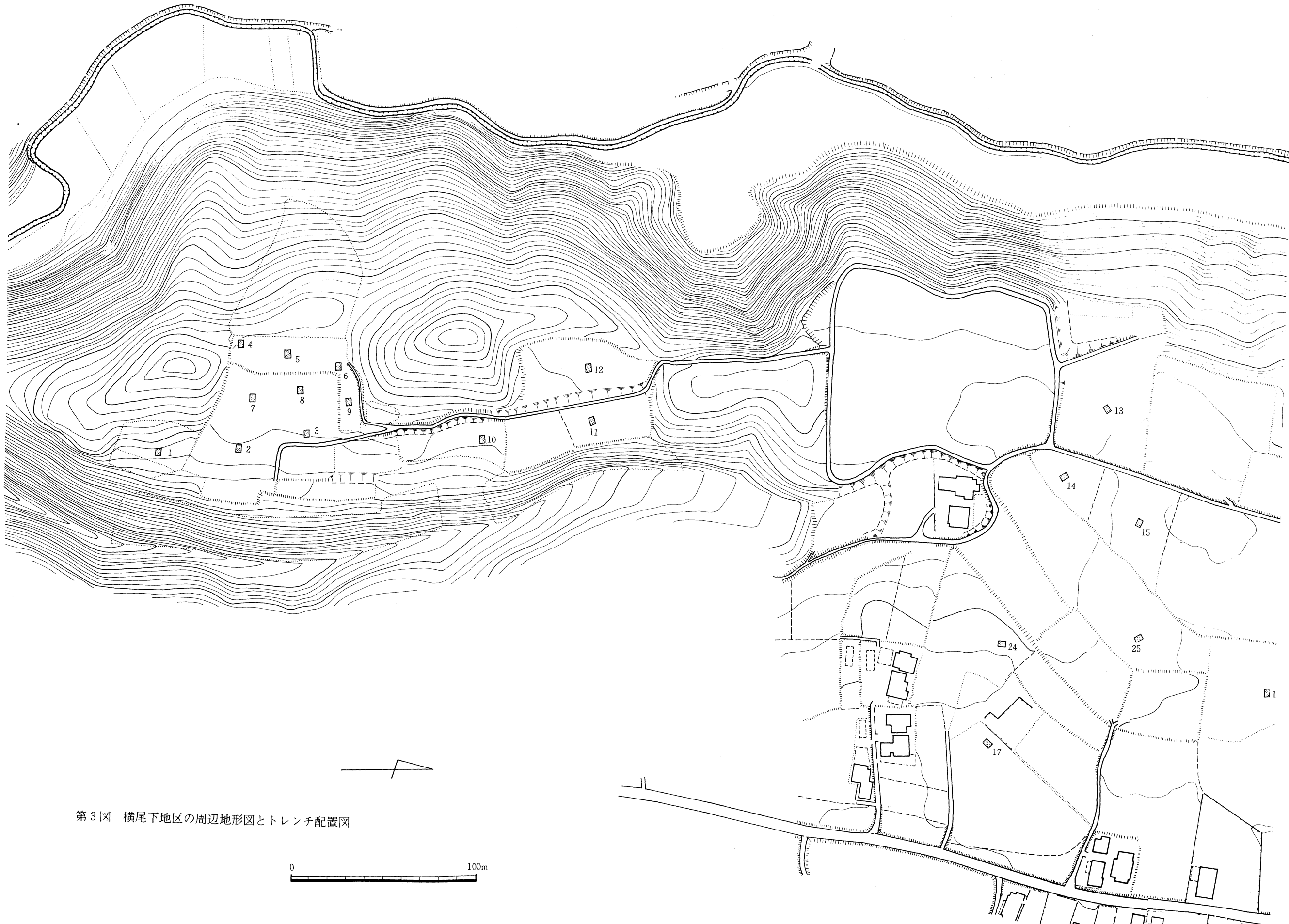
IV a層:暗黄褐色粘質土(飛渡遺跡III a層と同一)

IV b層:黄燈色パミス(飛渡遺跡III c層と同一)

V 層:暗褐色埴土(径2～3mmの軽石が混る)

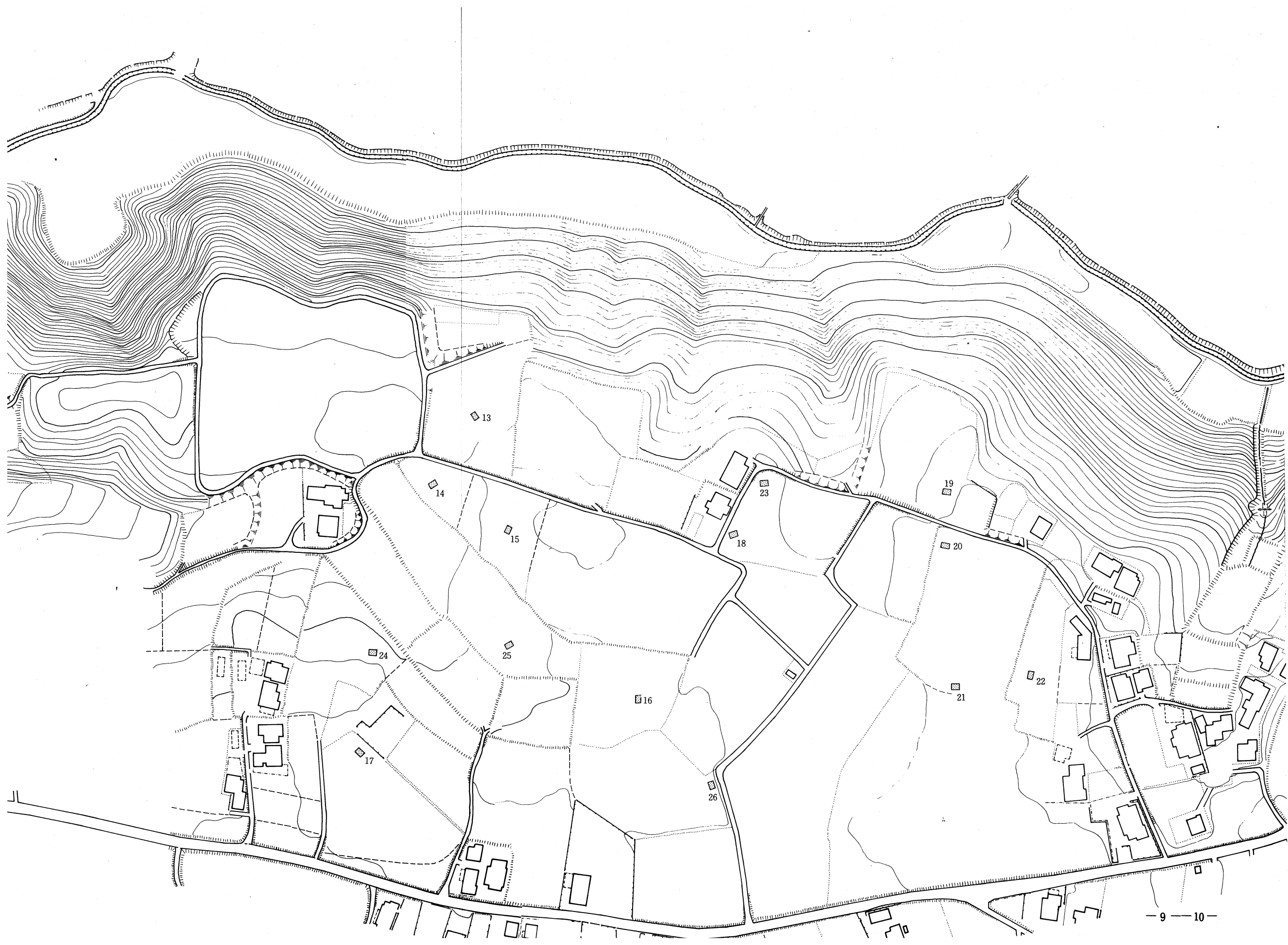
VI 層:明茶褐色シルト(サツマ層)

VII 層:暗茶褐色ローム



第3図 横尾下地区の周辺地形図とトレンチ配置図

0 100m



VI層:暗茶褐色ローム

VIII層:シラス

VII層:シラス

第3節 飛渡遺跡の調査

1. 飛渡遺跡の概要

飛渡遺跡は、台地が尾根状に南に伸びたその先端部に近い幅20m弱のやや平坦な尾根の頂部である。この尾根は台地側の付根と先端に丘があり、いうならば遺跡はこの丘と丘の間のやや平坦な鞍部である。鞍部の西側は急斜面となっているが、東側はゆるやかな傾斜をもつテラス状の地形となっている。

調査は当初このテラス状の緩斜面と鞍部とに第1～12トレンチまでの12本のトレンチを設定して遺跡の確認を行ったが、包含層が明瞭に把握できたのは第5トレンチのみであった。第9トレンチからも若干の遺物の出土を見たが土層の乱があり、包含層として明瞭に捉えるにはいたらなかった。

出土した遺物は縄文時代晩期と弥生時代の土器・石器であったが、二つの時代のものが同一層内に混在しており、また包含層も傾斜していることから、一枚の包含層として捉えざるを得なかった。

その後トレンチによる確認調査が終了した時点で、遺跡の取扱いについて協議がもたれたが、

設計変更による遺跡の現状保存は不可能であるとの結果があり、急遽第5トレンチを拡張し記録保存の措置をとることとなった。

このように飛渡遺跡の調査は二段階にわけて実施された。

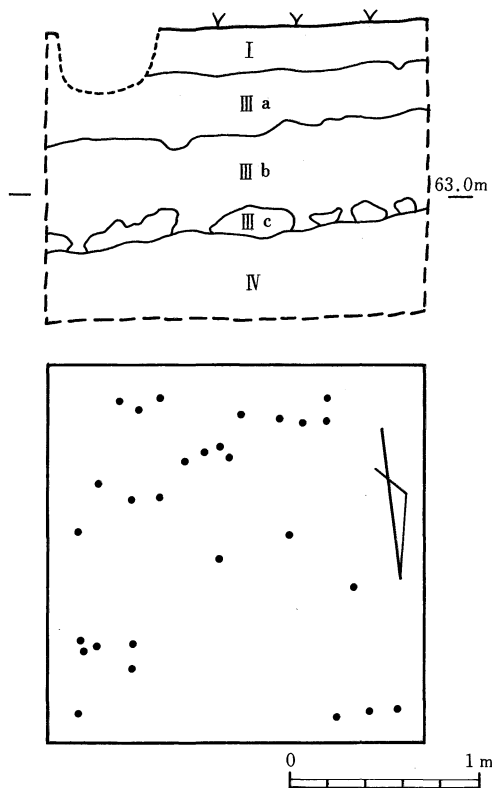
2. 第5トレンチ

鞍部中央に設けたトレンチで、II層は削平されていたもののIII a層以下は良好な状態で遺存しており、縄文時代晩期・弥生時代の土器・石器が出土した。なお、このトレンチの南北に設けた第4・6トレンチでは遺物が出土しなかったので、幅1mの長いトレンチを設け、南北への拡がりを追求した結果、遺跡は、この鞍部の両端を除く部分であることが判明した。

遺物については別項で述べる。

3. 第9トレンチ

鞍部からはじまるテラス状の緩斜面の南端に設けたトレンチで、表土直下III a層との境から何点



第4図 第5トレンチ遺物出土状況・土層図

かの土器が出土した。

4. 第5・9トレンチ拡張区

第5トレンチをほぼ中心に、南北に約40m、東西に約20mの区域を調査した。なお、第5トレンチを設定したトレンチの東隣の畑は約1mの段差で低くなっており、第8トレンチでも遺物の出土は見られなかったため、この畑までは拡張していない。なお、遺物の出土は、拡張区域のほぼ東端で途切れている。

包含層であるⅢa層をほぼ掘り終ったところで作成した地形図が第5図であり、この面が当時の地表面に近いものと思われる。この地形図と第6図に示した遺物の出土状況、接合状況を照しあわせてみると、鞍部から始まる浅い谷に向かって遺物は流れているような感じをうける。

○出土土器

出土した土器は、以下のⅠ～Ⅸ類に分類した。

Ⅰ類 1・2

第9トレンチ拡張区から出土した。出土状況は第8図及び写真図版4に示したが、この2個体が横に重なった状態であった。

平底の底部で、胴部の最大径は上位にもち、頸部はわずかにしまる。頸部から口縁にかけてはわずかに外反しながら口唇近くでは内湾する。口唇部は、外はするどい稜をもつものの、内はまるみをおびている。頸部内面にはにぶい稜を持つ。器面調整は、内・外面ともていねいな撫調整が施されている。内底および底部外面には指頭圧痕が残っている。胎土焼成ともに良好で、口唇から胴部上半まではすすの付着が多い。

土師質の甕形土器であるが、その形態的特徴は平底であることを除けば、成川式土器に似ているものの、胎土・焼成では成川式土器のイメージからはとおい。宮崎市熊野原遺跡に出土した甕CもしくはG類によく似ているようである。

Ⅱ類 3～13

弥生時代の土器を一括した。3・5・7～13は甕形土器で、4・6は壺である。13は大形の甕の胴部の破片と思われる。

Ⅲ類 53～79

岩片等を含まない良質の胎土を用い、内外面ともにヘラ磨を施された精製土器である。器形では浅鉢形土器が大部分であるが、76・77はあるいは鉢形になるのかもしれない。

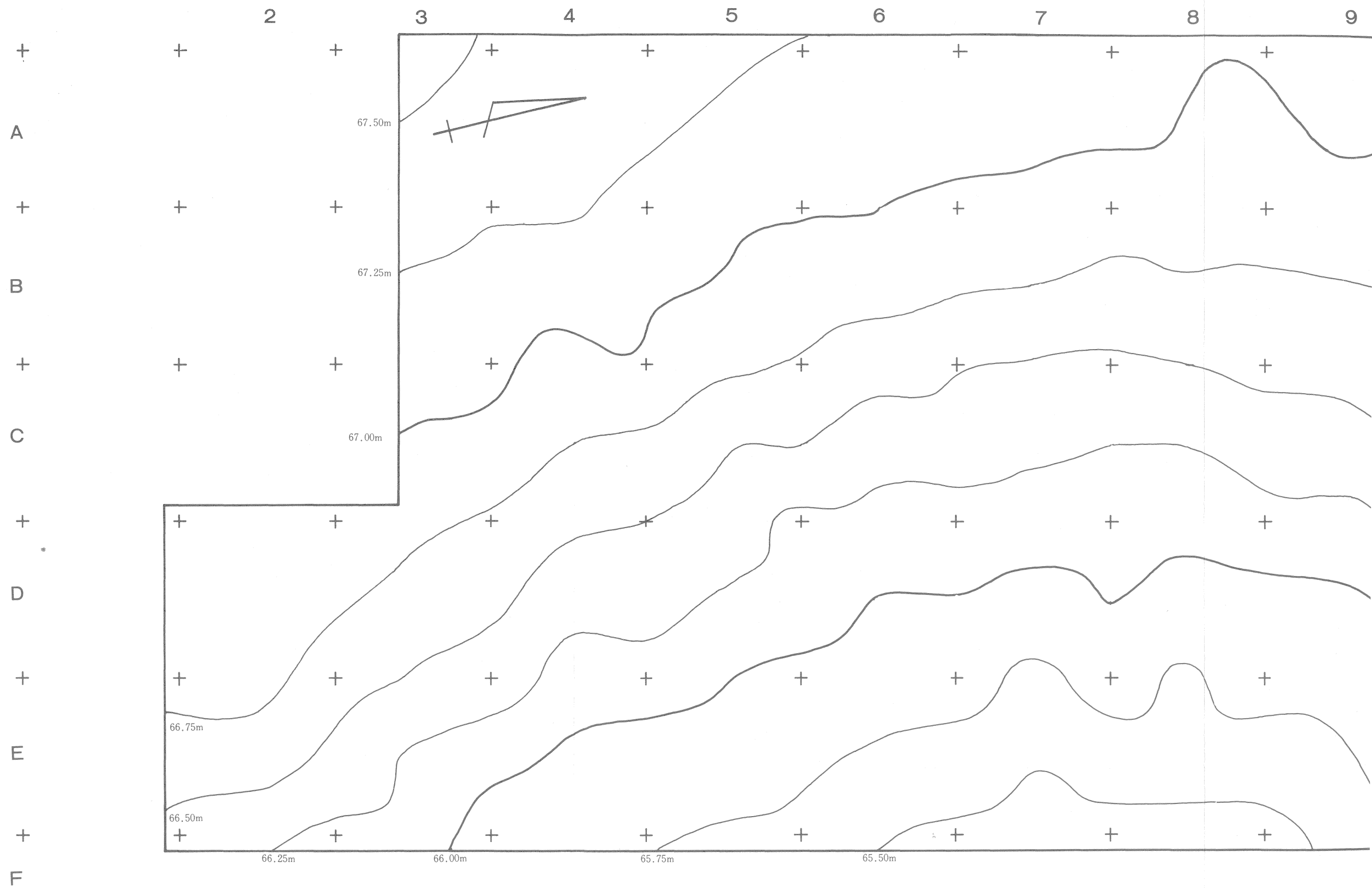
53～56は鱗状突起の装飾を持つ口縁部である。

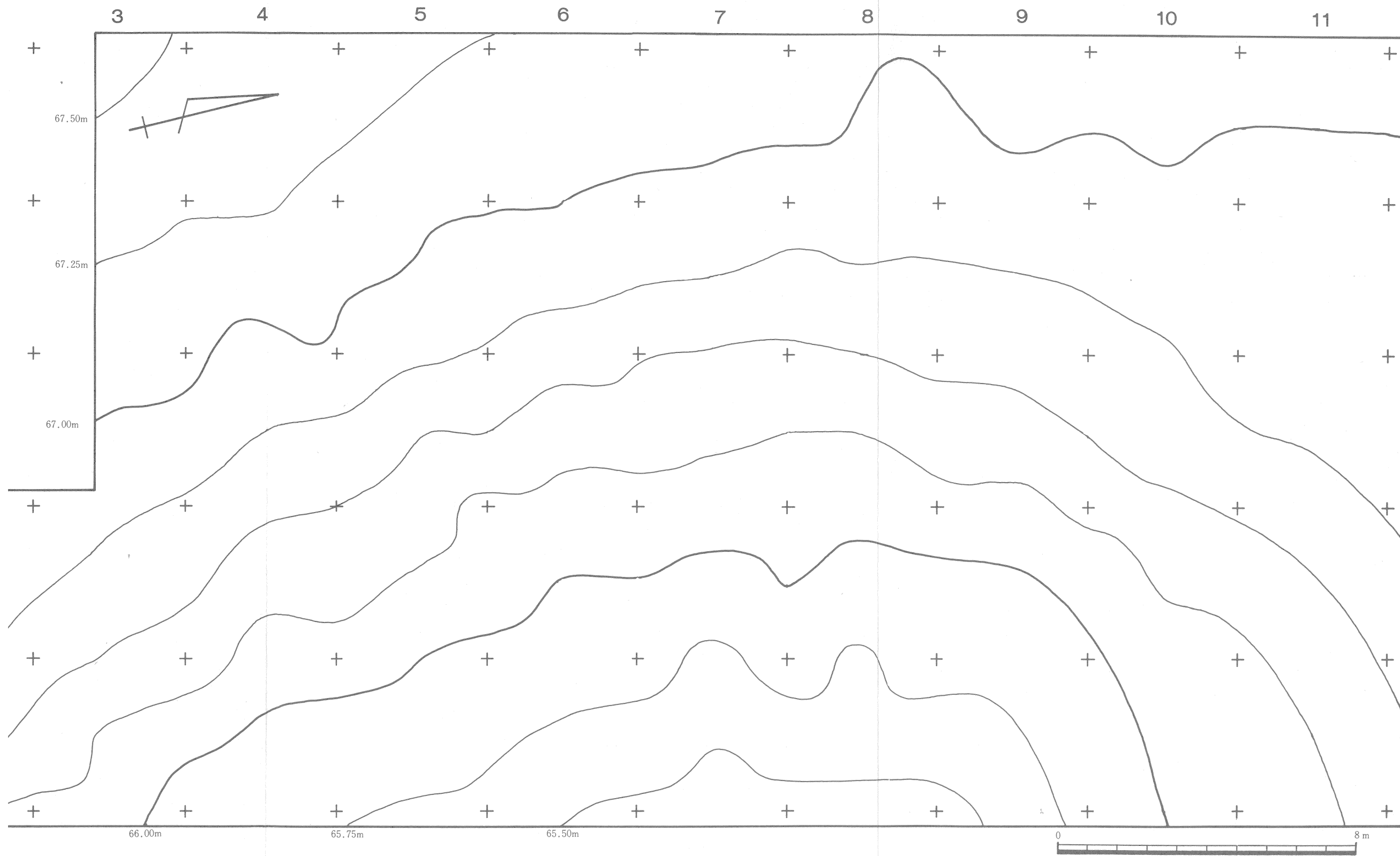
Ⅳ類 14～31

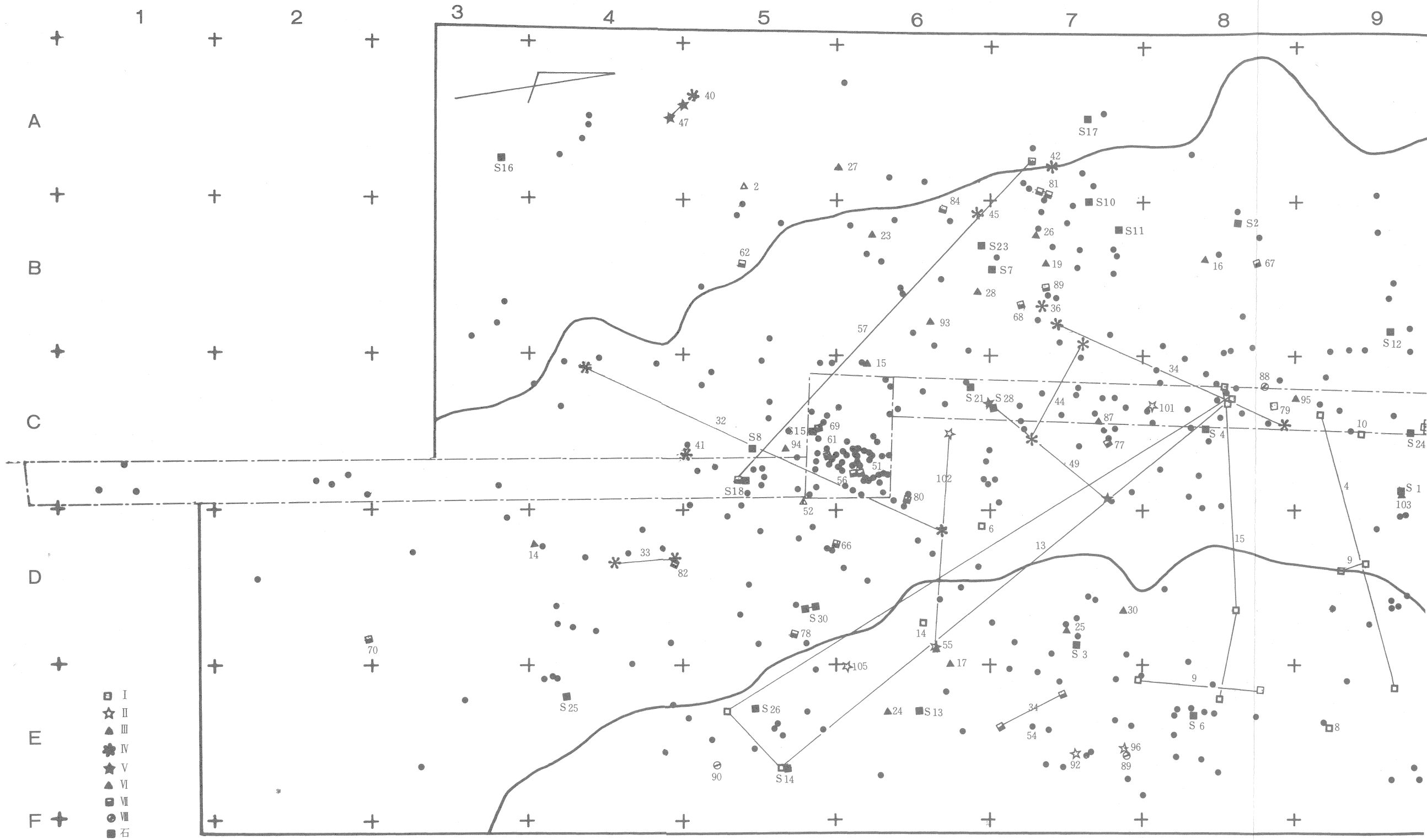
内面ヘラ磨で外面に貝殻条痕あるいは粗雑なヘラ磨の調整を施された鉢形土器である。胎土にはⅢ類でみられる鈹物の他に雲母がみられ、岩片等も多く含む。

Ⅴ類 88～90

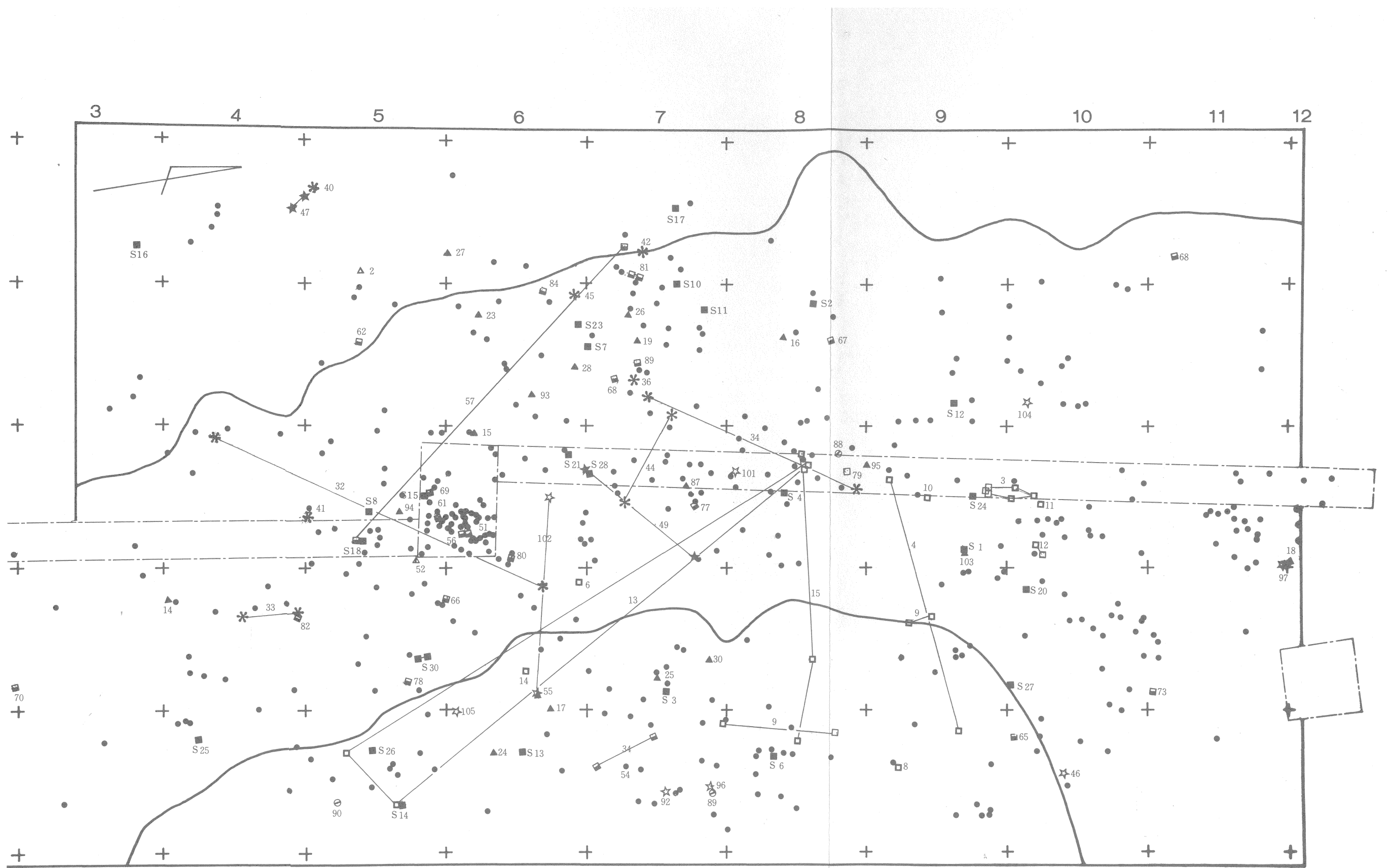
いわゆる孔列文土器である。内外面ともていねいな撫あるいはヘラ磨による調整で、鉢形土器と思われる。88の孔は貫通しないものである。





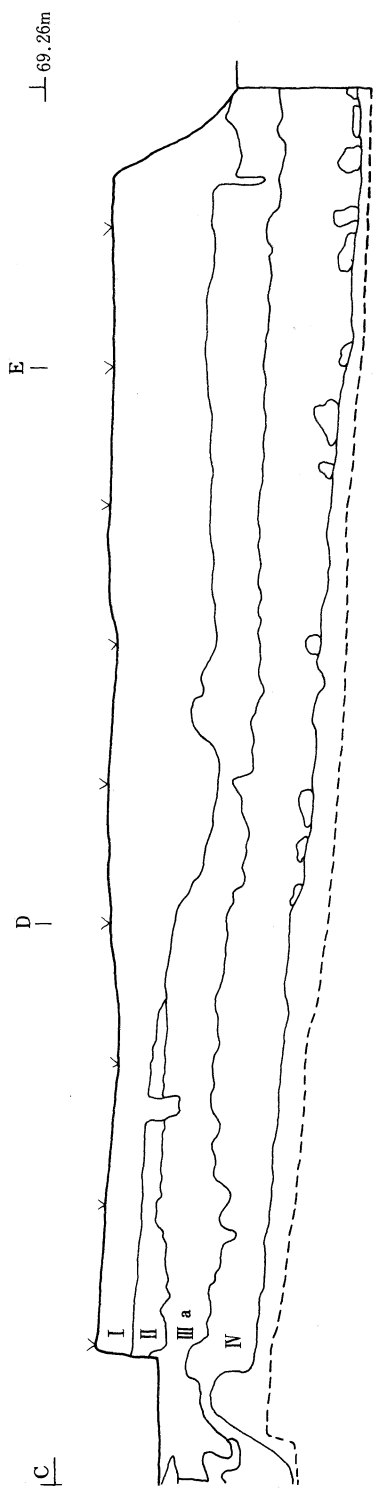
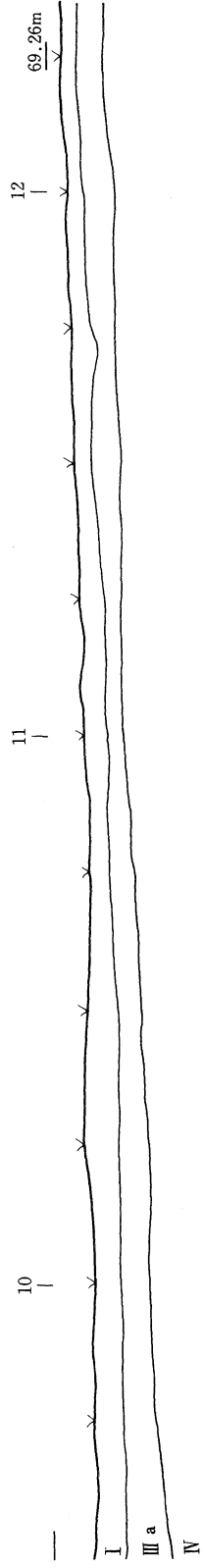
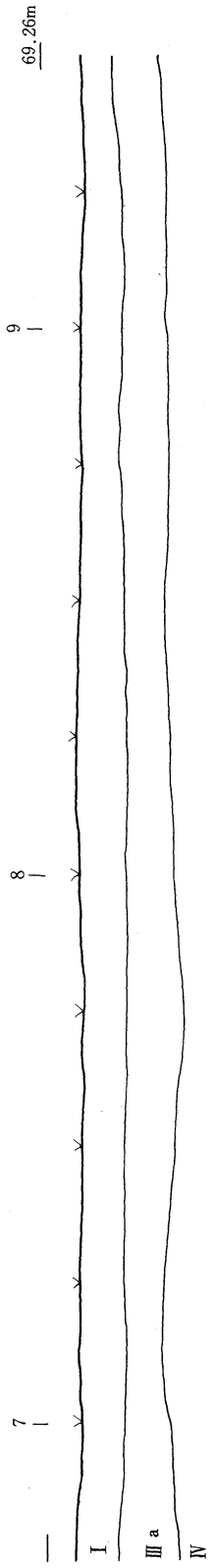


第6図 遺物出土状況

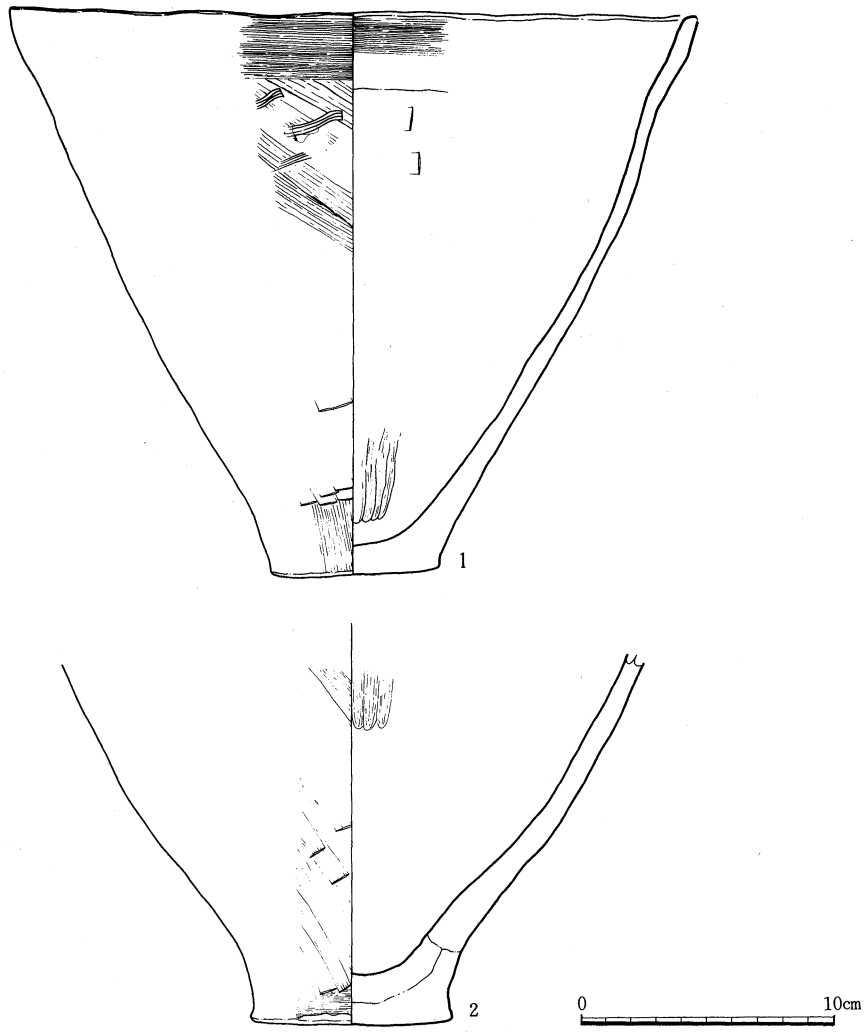


第6図 遺物出土状況





第7図 東西・南北土層図



第8図 飛渡遺跡出土土器(1)

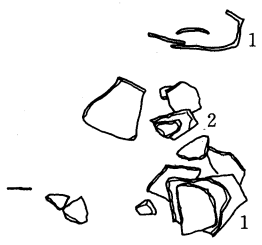
Ⅵ類 31~46

内面は撫調整、外面は貝以外の条痕による調整を施された鉢もしくは深鉢形土器である。おおむね、口縁部はまるみをおび、胴部に屈曲部をもつ。

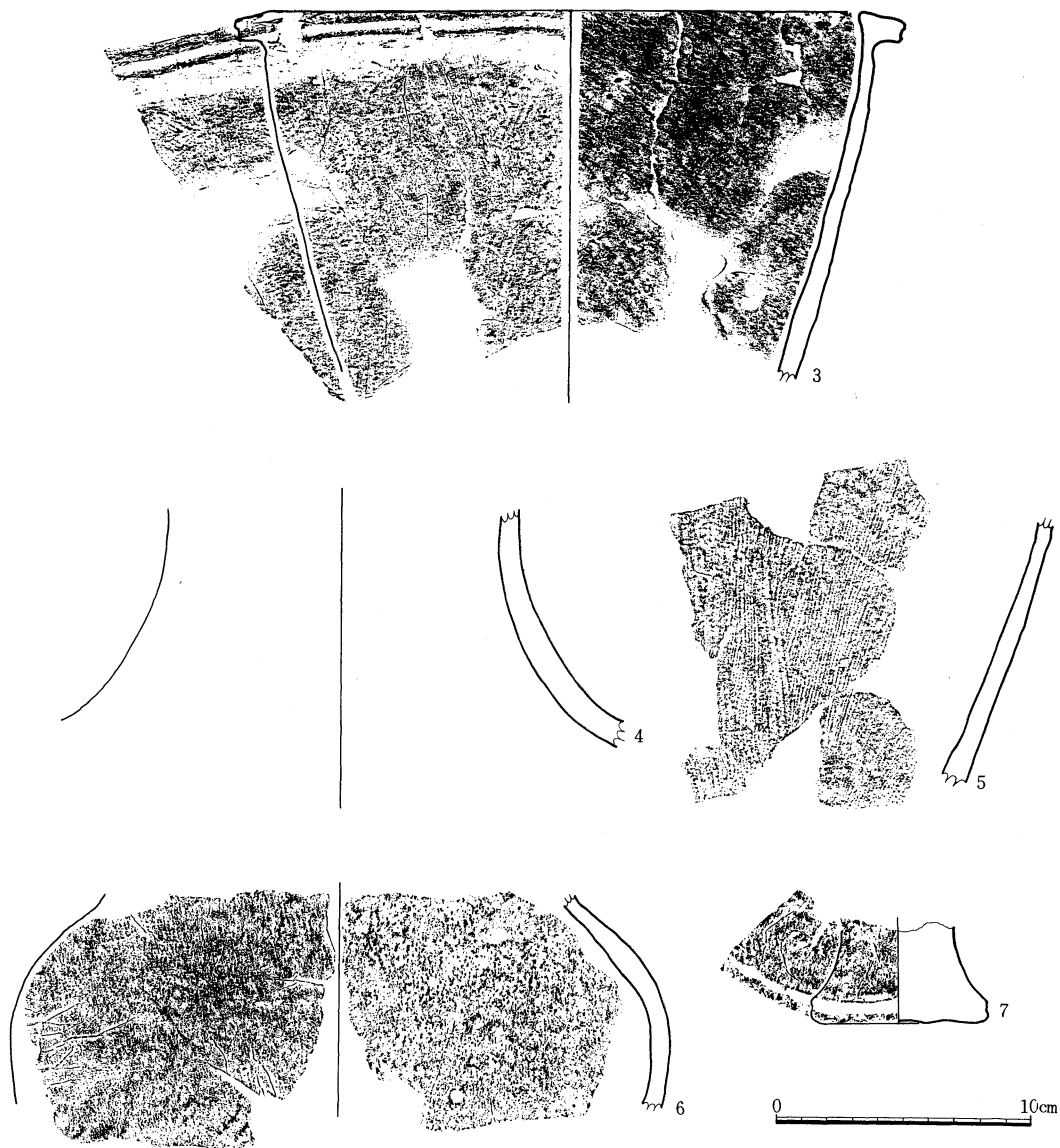
35は波状口縁の破片と思われる。31は屈曲部の箇所には鱗状の突起を持つものである。

Ⅶ類 47~52

47~51は、組織圧痕を有する土器である。組織圧痕は一般に蓆目圧痕と網目圧痕がみられるが、本遺跡ではここに示した網目圧痕のみであった。内面は撫もしくはヘラ撫の調整が施されている鉢あるいは浅鉢形の器形と思われる。



第9図 土器1.2出土状況



第10図 飛渡遺跡出土土器(2)

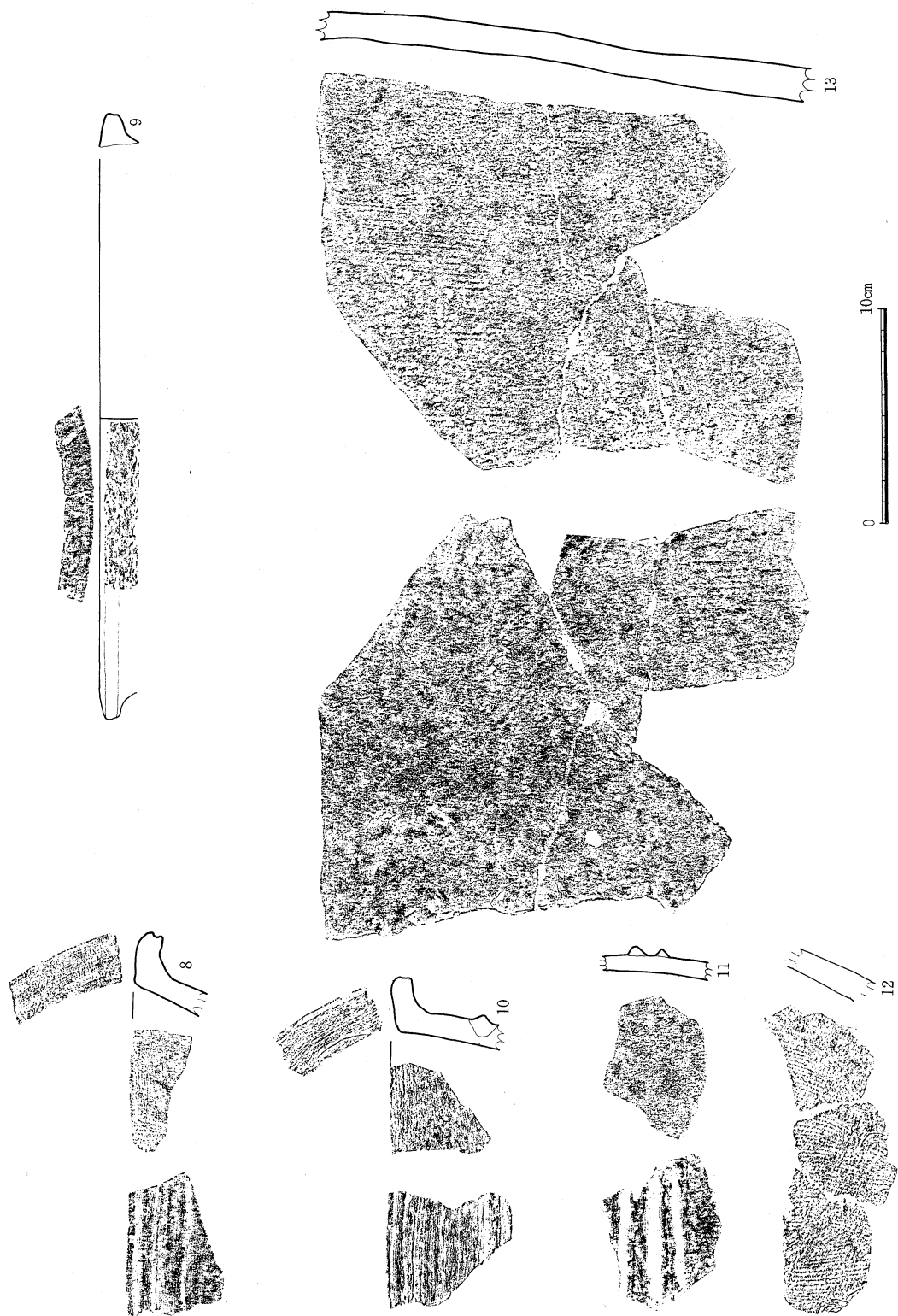
52は壺形土器と思われる。内・外面とも撫調整が施され、胎土には各種鉤物の他岩片をわずかに含む。74は鉢あるいは浅鉢形土器と思われる。胴部の屈曲部に突帯が貼付けられ三日月形の刺突が加えられている。

Ⅷ類 14~30

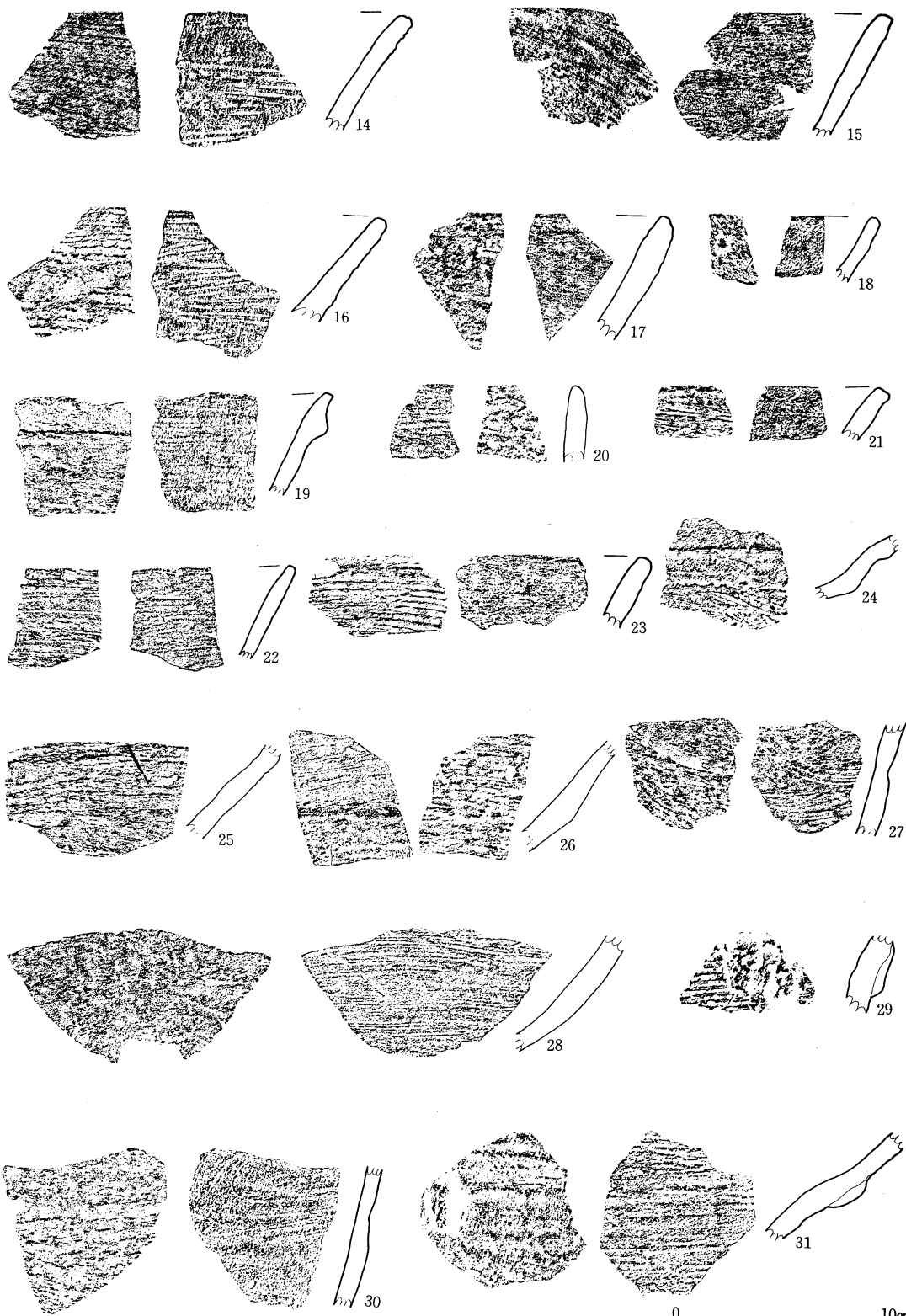
内外面ともに貝殻条痕による調整痕を残す粗製土器である。器形は鉢もしくは深鉢形と思われる。

Ⅸ類 91~106

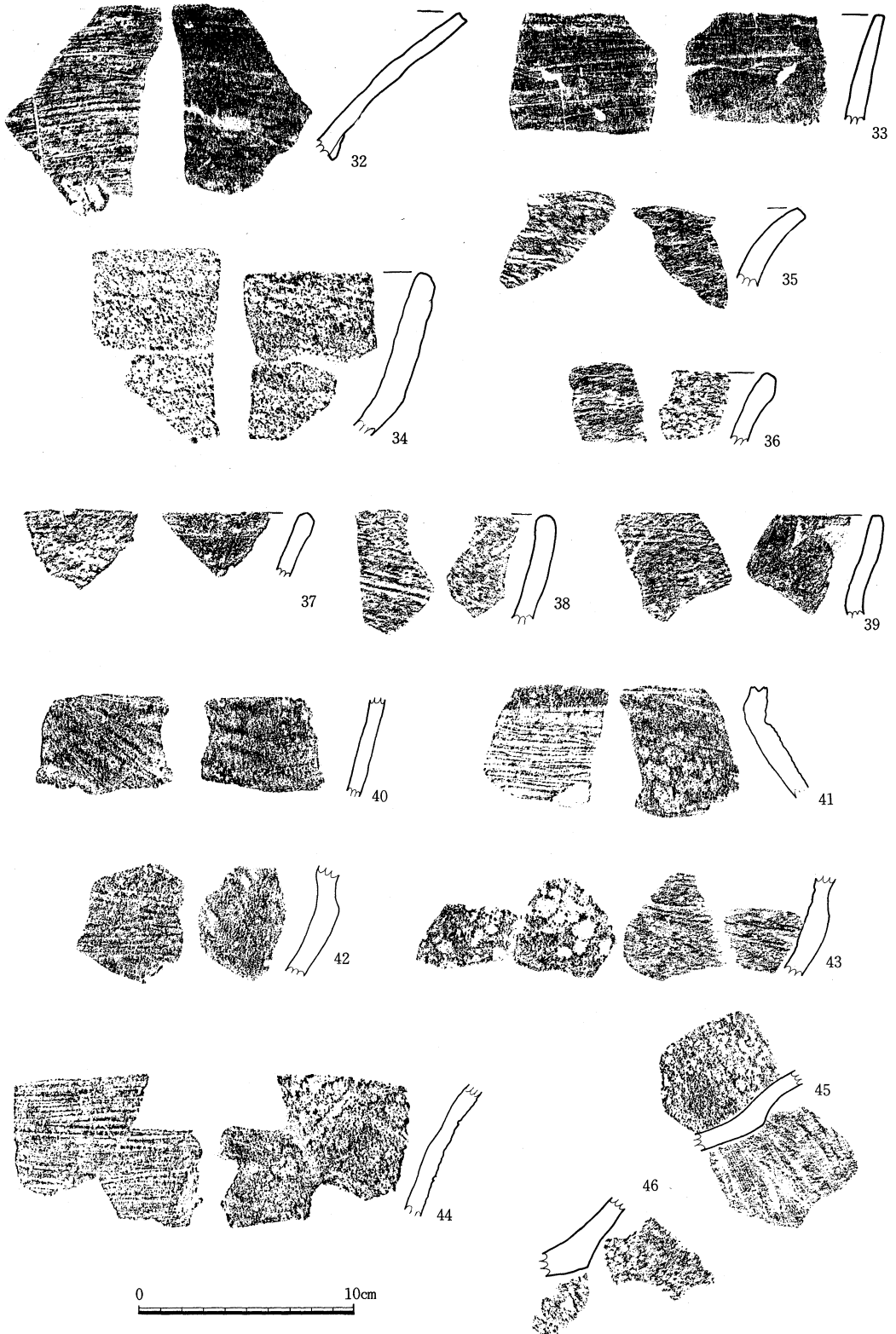
底部を一括した。鉢もしくは深鉢形土器の底部である。



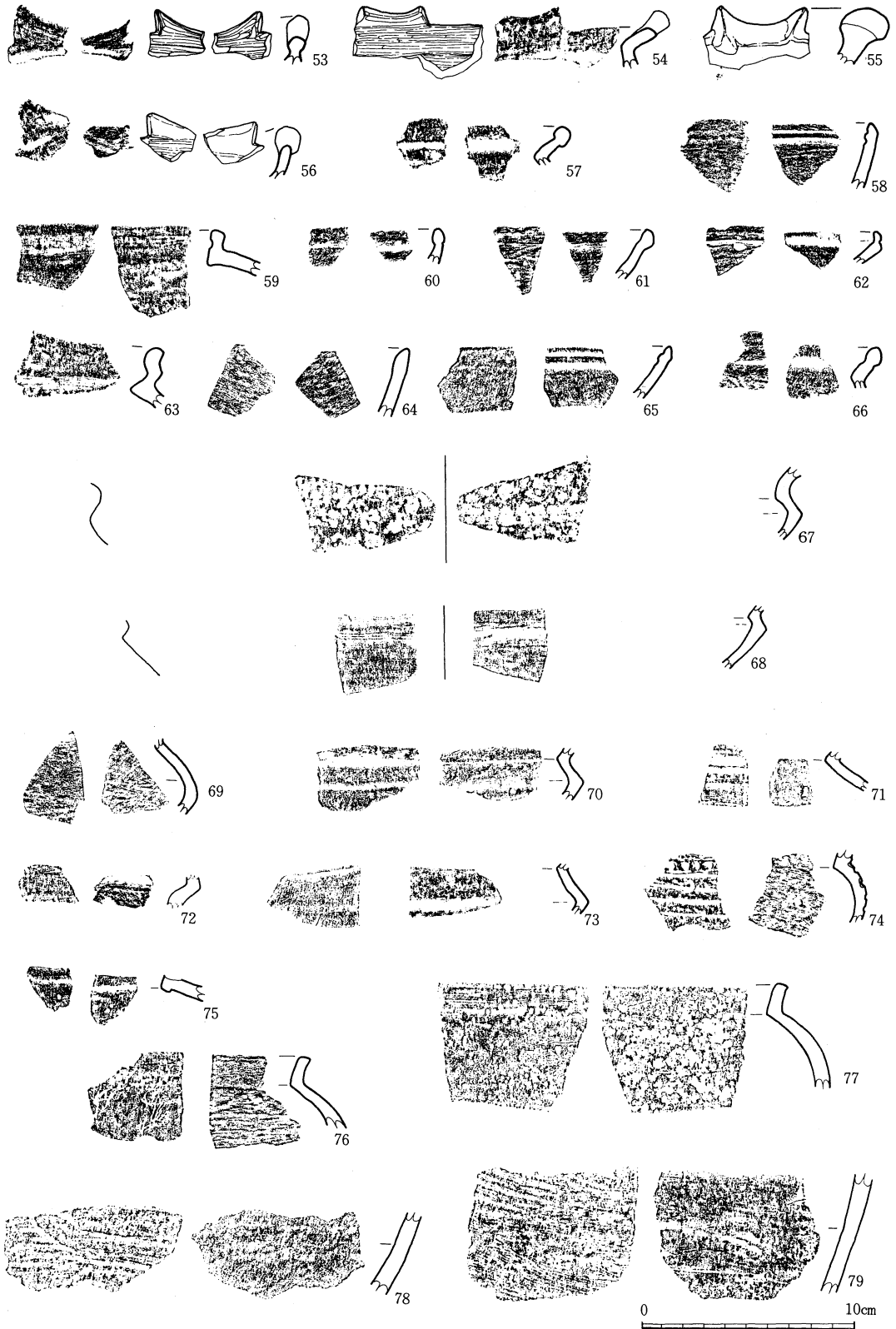
第11図 飛渡遺跡出土土器(3)



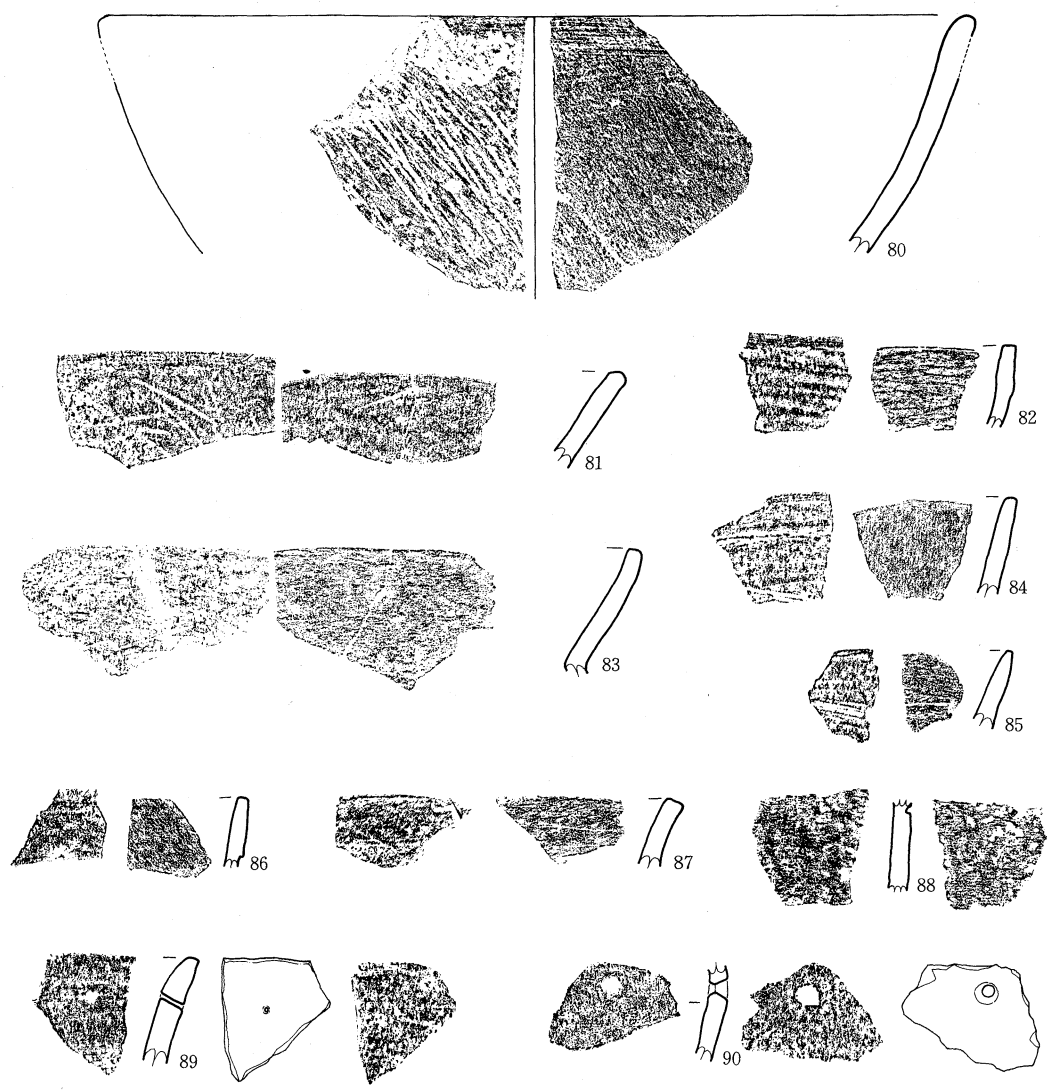
第12図 飛渡遺跡出土土器(4)



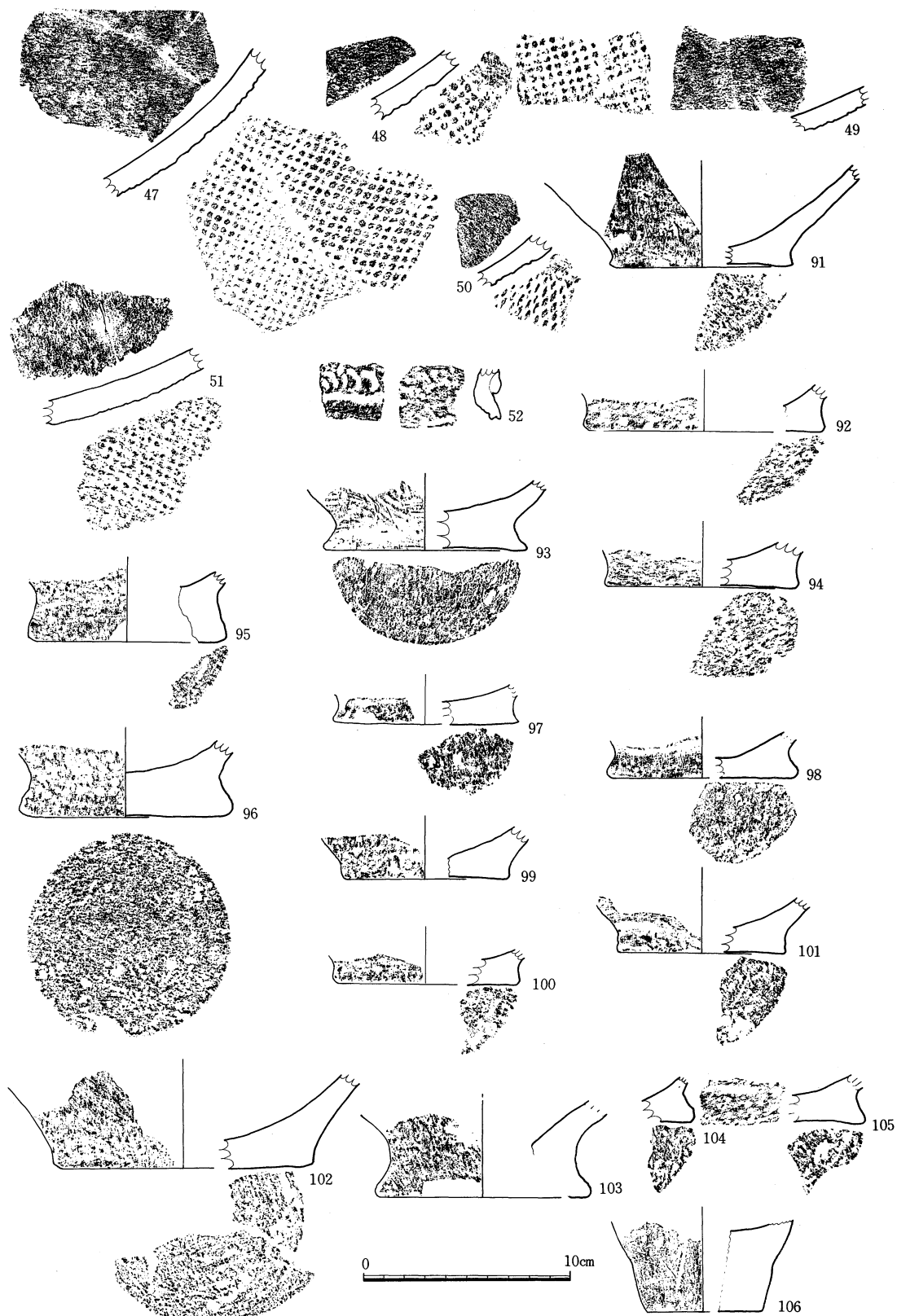
第13図 飛渡遺跡出土土器(5)



第14図 飛渡遺跡出土土器(6)



第15図 飛渡遺跡出土土器(7)



第16図 飛渡遺跡出土土器(8)

○出土石器

出土した石器は、石錘・打製石斧・石鏃・磨製石斧・円盤状石斧・横刃形石器・石槍の7種である。

石錘 S 1～3・15

S 1～3はいずれも砂岩の扁平な円礫を用いたもので、長軸の両端に抉をいれている。抉部は表裏に剝離を施した後、敲打によって整えられている。

S 15は凝灰岩を用いており扁平にかつ円形に整形しており、上下端にかすかな敲打痕を残す。この石器を石錘として取扱うのは躊躇するが、ここでは便宜的に石錘として分類しておく。

打製石斧 S 4～8

頁岩もしくは粘板岩の剝片を用いている。S 4は刃部・頭部とも欠損している。S 5は上下両端とも雑な剝離によって刃部が形成されており、右側縁部には敲打による抉入がある。S 6は両面に部分的に研磨痕が残る。

石鏃 S 9

頁岩の剝片を用いた小形の石鏃で、片方の脚は欠損している。

磨製石斧

S 10は磨製石斧の刃部片である。

円盤状石斧 S 11～13

石材はいずれも頁岩である。S 11は、全周に浅い剝離によって刃部(?)が形成されているが、刃部は使用痕なのか鈍磨している。S 12・13は半欠であるが、その特徴はS 11と同じである。

ここでは一応円盤状石斧として分類したが、その機能は不明であり、便宜的な分類である。

石槍 S 15

粘板岩のおそらくは剝片を素材とするもので、ややラフな剝離によって厚さが調整された後細かな階段状剝離で両側縁が調整される。基部の側縁は敲打に近い剝離で調整されている。

横刃形石器 S 16・17

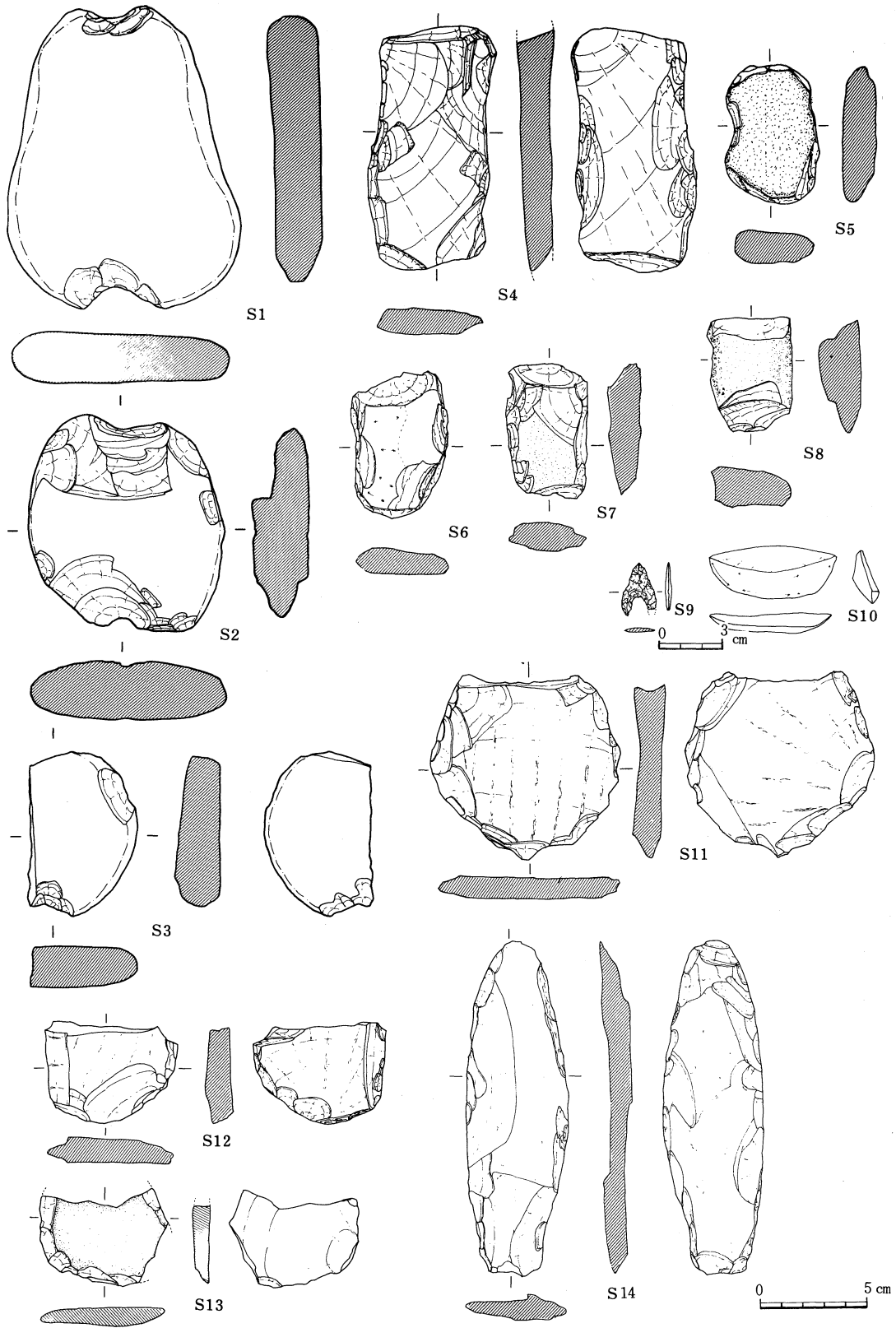
S 16は粘板岩の、S 17は頁岩の、剝片を素材としており、刃部は使用痕なのか鈍磨している。

叩石 S 18～28

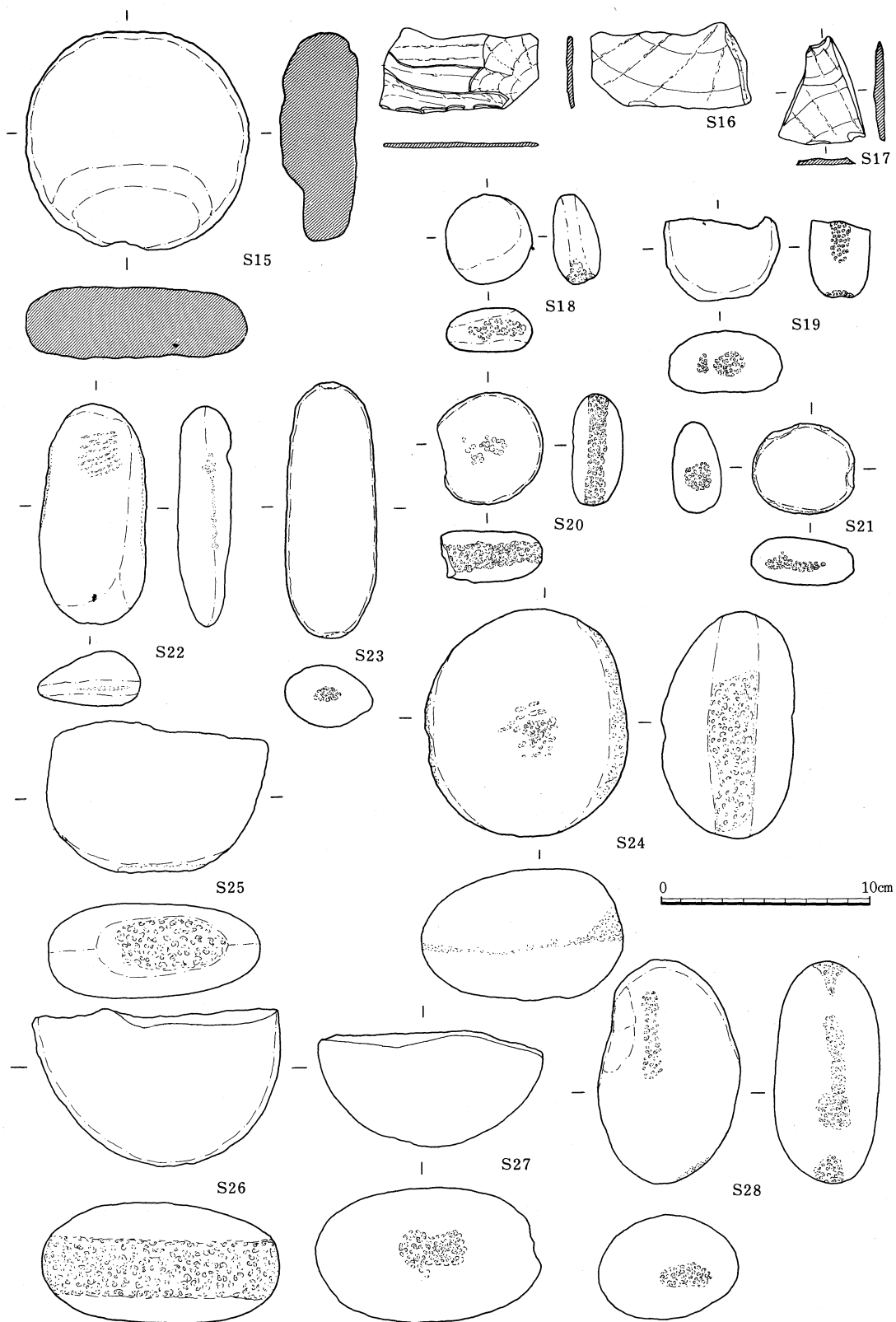
S 18～21は砂岩の扁平は小円礫を用いたもので、側縁部に敲打痕が残る。敲打痕は全周に残るものと、部分的に残るものとある。小形の叩石である。

S 22・23は細長い円礫を用いており、長軸の両端に敲打痕が残る。S 22はやや扁平な形をしており、その偏平面の一部にも敲打痕が残る。素材はともに砂岩である。

S 24～28は大形のもので、側縁部のほぼ全周に敲打痕が残る。S 24は側縁部のみでなく、表裏中央に敲打痕が集中し、わずかなくぼみを持つ。S 26・27は、側縁部の敲打以外に、表裏面は研磨をうけたかのような平滑面をもつ。おそらく磨石としての使用によるものであろう。



第17图 飛渡遺跡出土石器(1)



第18図 飛渡遺跡出土石器(2)

第4節 島廻遺跡の調査

1. 遺跡の概要

確認調査の対象地域の主要部となる台地の、ほとんどの切土部分にトレンチを入れたが、台地中央部には特殊農地保全整備事業そのものの対象とならない茶園があり、台地全体の解明にはならなかった。

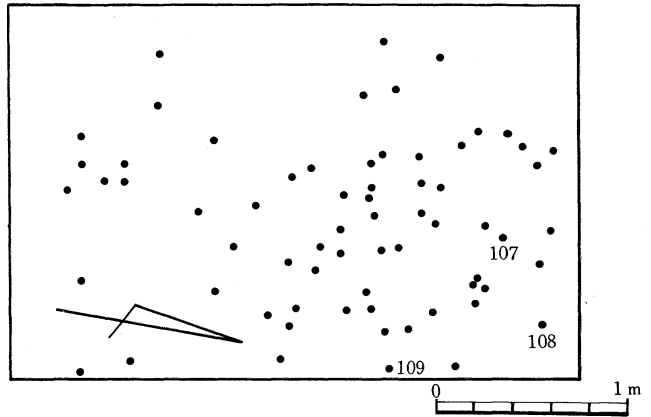
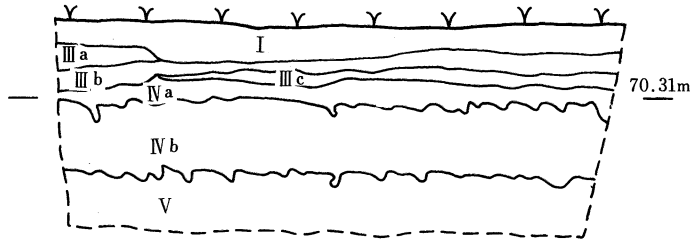
包含層の確認されたのは第18～20・23トレンチで、その出土層序はいずれもV層であり、縄文時代早期の遺跡である。これらを除く他のトレンチからは表土から若干の遺物が採集された以外はまったく出土していない。

なお、第13～15・24トレンチのV層から安山岩・砂岩の垂角礫・角礫が散在して出土したが、これらのトレンチより以南の畑境の土手等に礫がはまりこんでいるのが広い範囲で見られたことから、人為的に運ばれてきたと判断するよりも何等かの自然営力によるものと判断したほうが妥当であるように思われた。また、土器・石器等もまったく出土していないことはこれを裏付けるものと思われる。

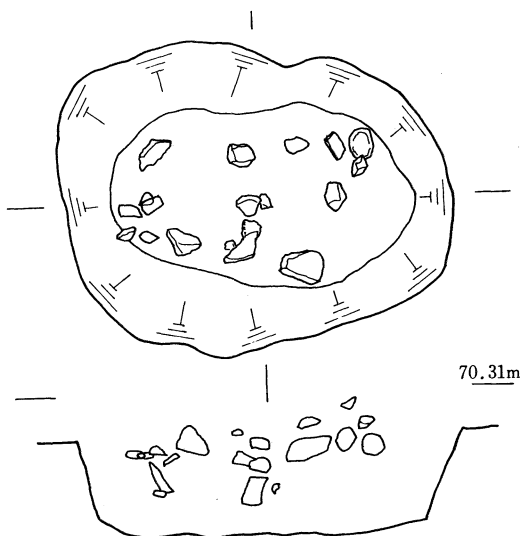
2. 第18トレンチ

このトレンチは、台地のほぼ中央に近い箇所で、西の急斜面に向けて走る浅い谷の谷頭に近い南岸に設定した。

このトレンチでは、第V層から礫がやや密に出土し、その中に数点の土器がまじっていた。礫は第13～15トレンチで出土した礫とは異なり円礫が多くほとんどが焼けており、この礫を残しながら堀さげると若干の色調の変化と硬さの相違があり、それを堀りあげたら、第20図の如くになった。肉



第19図 島廻遺跡第18トレンチ遺物出土状況・土層図



第20図 島廻遺跡第18トレンチ出土集石

眼による限り、灰・炭化物等は観察しえなかったが、礫の状態・土器を共伴することから集石遺構であると判断したい。ただ、この時期の堀込みを持つ集石は、堀込みの底面に礫が安定するのが通常であるが、この遺構では底面からかなり浮いている点に疑問を感じる。

共伴した遺物のうち107~109を図示した。107・108はわずかに外に開く口縁部の破片で、口唇に刻がはいり、口唇直下に刺突連点文がほどこされている。この連点文は斜にきれいに一直線に並んでおり、かつその刺突の形状から、貝殻の腹縁部である可能性もある。

3. 第19トレンチ

このトレンチは、第18トレンチと浅い谷を隔てて北西に約100m離れた地点に設定した。このトレンチでも、安山岩・砂岩の小さな角礫・亜角礫が散在して出土し、その中に土器がまじって出土した。これからの礫は第13~15トレンチと同じような状況であり、第18トレンチの集石とは異っていることから集石であるとする妥当性に欠けるように思われる。

共伴した土器のうち4点を図示した。111は胎土に石英・長石・輝石等を含むものわりと良質のもので、焼成も堅緻である。内面はヘラ撫による器面調整が施され、外面は貝殻腹縁刺突の後、再度撫調整を施している。113は、胎土・焼成は111と同じであるが、内外面とも撫による器面調整のあと、縦位の貝殻腹縁刺突の文様が施されている。110には刺突連点文と楔状

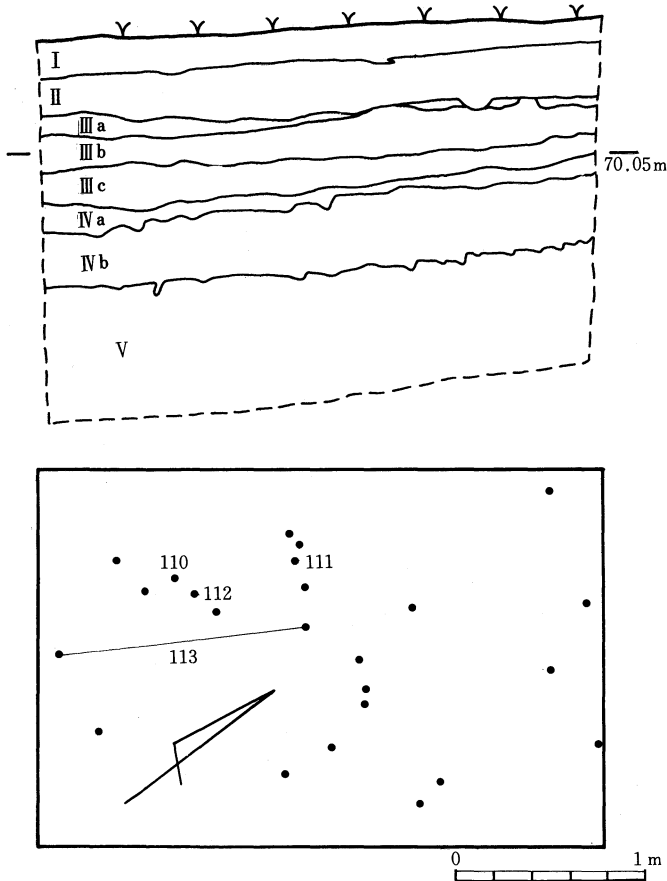
の貼付文がある。

4. 第20トレンチ

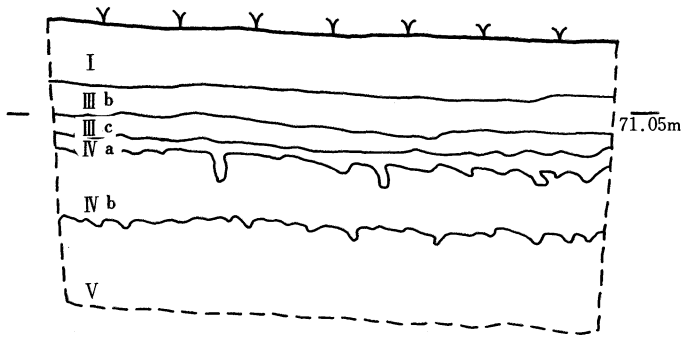
このトレンチは第19トレンチから約30m東側の箇所、浅い谷を隔てて第18トレンチと向かい合う位置である。

このトレンチでは礫の出土は少なく、第18・23トレンチのようではない。また出土した土器もわりと大きな破片であった。

114は胎土に石英・長石・輝石の鉱物の他径1mm前後の岩片を含んでいるものの焼成は堅緻で、外面は暗褐色、内面は淡褐色の色調を呈している。内面の器面調整はヘラ削のあと撫調整が施されており、外面は撫調整のあと文様が施されてる。文様は刺突連点文であるが、口唇直下には、横に巡る押引文が三条あり、その下に縦の刺突連点文が施される。116は二次的火熱のためか、風化が激しい。胎土に石英・



第21図 第19トレンチ遺物出土状況・土層

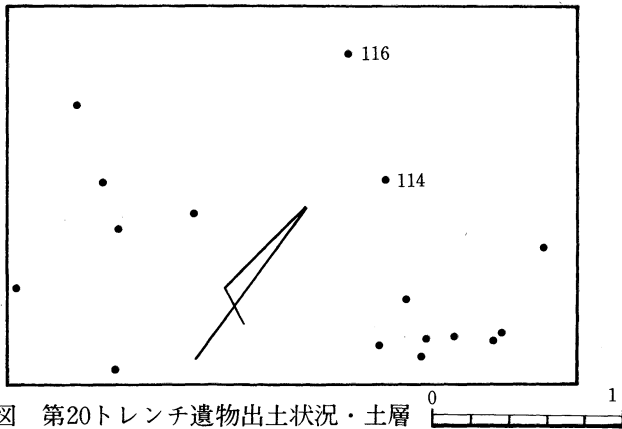


長石・輝石・雲母などの鉱物の他
岩片を含んでいる。焼成・器面調
整については風化のため明らか
にしがたい。底部に近い部位に羽状
に貝殻腹縁刺突文が施されている。

114・116の両者とも円筒形の器
形であると思われる。

5. 第23トレンチ

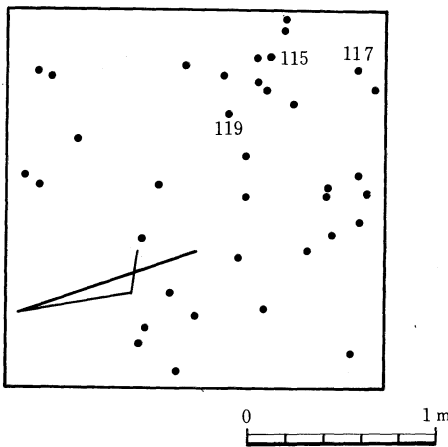
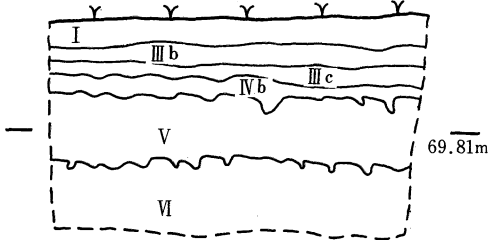
このトレンチは、第18トレンチ
の西約30mの箇所に設けた。第18
トレンチで確認された包含層が、
西にどこまで広がるかを追求する
目的で設けたものである。遺跡は
さらに西側に広がっていたものと
思われるが、このトレンチのすぐ
西は約1mの段差をもって道路と
なり、さらにその西は約3m近い
段差の畑となっている。以上のこ
とから、この第23トレンチは遺跡



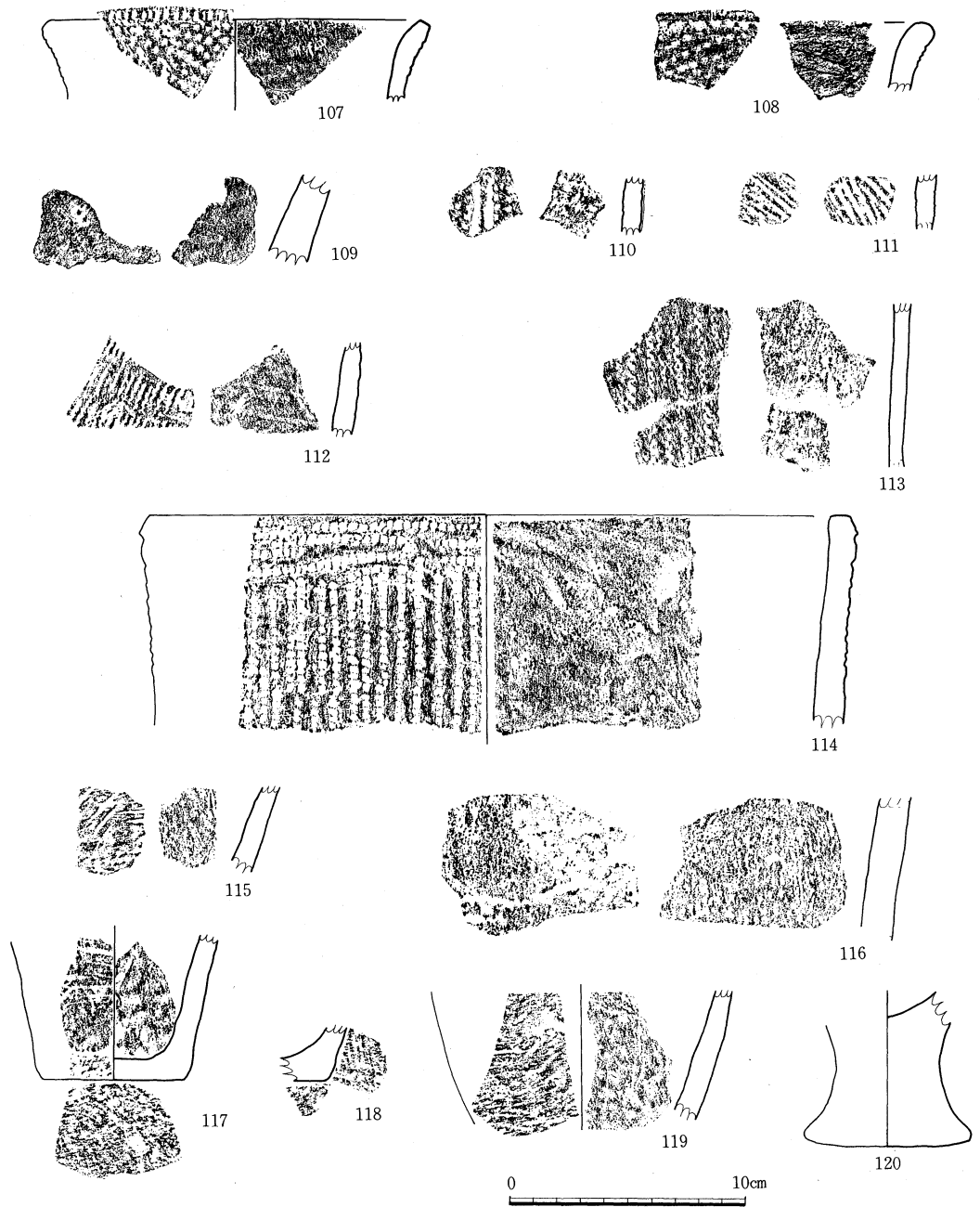
第22図 第20トレンチ遺物出土状況・土層

の南西端にあたると言えよう。

出土した遺物は115・117～119の土器であるが、
その胎土・文様から同一個体である可能性が高い
のでまとめて記述する。胎土には石英・長石・輝
石の鉱物の他、小さな岩片も含んでいる。焼成は
堅緻であり内面は黒褐色、外面は淡褐色の色調を
呈している。外面の器面調整は二次的火熱のため
判然としないが撫調整のようである。内面は指頭
の圧痕が残っている。内底には幅1cm弱のヘラに
よる撫痕が残っている。施された文様は綾杉状の
条痕文である。



第23図 第23トレンチ遺物出土状況・土層



第24図 島廻遺跡各トレンチ出土土器

第5節 小結

1. 飛渡遺跡の立地について

飛渡遺跡は、南へ張り出す尾根先端部にならぶ小丘の鞍部に立地する。鞍部の頂部は開墾等たより削平を受けていたが、鞍部から始まる浅い谷に包含層が残っていた。出土遺物は縄文時代晩期・弥生時代・古墳時代にわたるが、一枚の包含層中に混在する状況であり、かつ遺物の平面的出土状態も、各時代毎のまとまりはみられず、谷に沿って流れ込んだような状態を示していた。個々の遺物の出土状態も、狭義の意味での原位置を示すものとは思われない状態である。以上の点から、各時代における生活面は鞍部の最高位面にあったのではないかと思われる。

このような立地を見ると、弥生時代の遺物の出土に注目したい。すなわち、一般に当時の生産基盤とみなされる田地からは隔絶しており、また高地性集落の立地とも異っている点である。今後、このような立地に注目する必要があると思われる。

2. 飛渡遺跡の出土遺物について

縄文時代晩期の土器はおおむね、黒川式の範疇にはいるものと思われる。弥生時代の土器は、中期末～後期に位置付けられる山之口式土器に比定されようか。

古墳時代の壜は鹿児島県内での出土例は知られていないが、宮崎県熊野原遺跡に出土した壜によく似ている。熊野原遺跡では多数の住居址が検出され、それらの住居址内からの出土遺物であるが、これらの住居址は、古墳時代初頭布留式併行期に位置付けられている。また本遺跡出土の壜形土器、その胎土・焼成・器形等の特徴から、県内の古墳時代に一般的に見られる成川式土器とはかけはなれており、熊野原遺跡例に類似していることから東九州系の土器と捉えることが妥当かと思われる。

石器も多種のものが出土したが、先に述べたような出土状態であり、どの時代の土器と共伴するか、出土状態からの判断はむつかしい。しかし、他遺跡例と比較すると、叩石以外の石器は縄文時代晩期の所産と判断して間違いないように思われる。

そこで注目したいのは、石錘の出土である。石錘は一般に魚網の錘として理解されているが、そうであるならば海岸から隔絶した地に出土したのは、海での漁よりも河川での漁の想定したほうが、理解しやすいと思われる。また石槍状石器・円盤状石斧についても今後その機能等の解明が、当時の社会の実相に近付くために必要であると思われる。

3. 鳥廻遺跡について

縄文時代早期の単純遺跡であるが、その立地については他の同時期の例と同様である。このような立地が当時においては普遍的であり、その普遍性に当時の社会の実相へ迫るキーワードがあると思われる。更に類例が増加しその分析検討が期待される。

出土土器は各トレンチ、換言すれば、谷頭の各地点毎にその形式が各々と異なっている。縄文時代早期という大きな時間枠の中で、断続的にここに人が住みついていたのであろう。

引用文献：宮崎県教育委員会「宮崎学園都市遺跡発掘調査報告第2集 熊野原遺跡」 1985

第4章 田之浦地区の調査

第4章 田之浦地区の調査

第1節 調査の概要

調査の対象地域となったのは、白木原集落の北に広がるゆるやかな起伏を持つ台地である。この台地は東に安楽川が南流し、また北・南ともにその支流が東西に流れ、三方ともに深い谷が刻まれている。また、西側は急峻な山地でその遷移点に現在の集落は位置している。台地のほぼ中央には浅い谷が東西に走っており、この谷が台地全体にゆるやかな起伏をもたらしている。現況はほとんどが畑地として利用されており、その開墾のためか、各所にシラスの露呈した畑がみられる。

調査は2 m×3 mのトレンチを15本設定して行った。いずれも特殊農地保全整備事業の工事で切土が予定される箇所、開墾によってシラスが露呈している部分を避けた。しかし、畑の客土にごまかされて、第3～8・14・15トレンチでは耕作土の直下はシラスもしくは薩摩層で縄文時代早期以降の包含層は残っていない。残りのうち第1・2・9～13トレンチでは赤ホヤ層以下の土層は残存していたが、第1・2トレンチを除いていずれも不安定な推積で土層の判断に苦慮した。また、第2トレンチでは赤ホヤ層以下の土層は安定して残存していたが遺物は検出されなかった。

遺物包含層を確認できたのは、第1トレンチのみで、この近辺のみが開墾による削平をまぬがれたものと思われる。

第2節 土層

標準的な土層を単独で求めることは不可能な状態であったので、複数のトレンチの状況を総合して、この遺跡の標準的な土層を仮定する。なお、台地全体のいづこにおいても赤ホヤ層の上位に自然土層の推積がみとめられなかったので、赤ホヤ層をⅡ層としてとらえた。

- I層：耕作土：トレンチの場所によって異なるが、おおむねシラス主体の壤土である。
- Ⅱ層：明黄燈色シルト：赤ホヤ層である。下位には粒の小さな降下軽石がブロック状にはいるが、上位はシルト質の火山灰である。
- Ⅲ層：暗黄褐色シルト：縄文時代早期の包含層である。径2～3 mmの白色もしくは黄色の軽石を含む。
- Ⅳ層：暗褐色埴壤土：やわらかく光沢がない。県内他地域では縄文時代早期の遺物を包含することが多いが、ここでは遺物は検出されなかった。
- V層：淡黄褐色シルト：薩摩層と思われる層であるが、非常に固くしまった土層で、薩摩半島でみられるような軽石はほとんど含まれない。
- Ⅵ層：暗褐色ローム：やわらかなロームである。ここでは旧石器を出土しなかった。
- Ⅶ層：シラス



第25図 白木原遺跡周辺地形図・トレンチ配置図

第3節 白木原遺跡の調査

各トレンチの概略はさきに述べたとおりで、第1トレンチ付近に遺物包含層は残っているものと判断される。第1トレンチはこの台地中央を東西に走る浅い谷の谷頭に近い部分である。

遺物を包含する層はⅢ層暗黄褐色土層で、軽石等を多量に含む層である。この層は従来県内各地の遺跡で「青灰色土層」と呼ばれた層と同一のものと思われる。なおⅣ層からは遺物の出土はなかった。

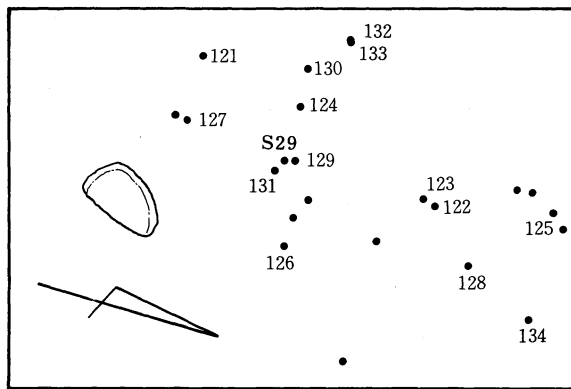
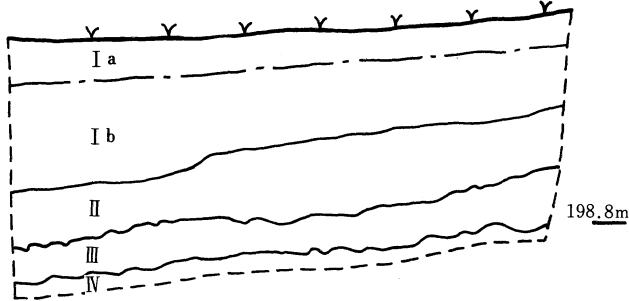
出土した遺物は第27図の石鏃と第28図の土器である。その出土状況は第26図に示すとおりであるが、ややまとまりに欠けるものの概して谷部にいくに従い遺物は少くなるようである。なおトレンチ内のもっとも東に砂岩の大きな礫が出土しており、一面は風化でボロボロであるが、その反対面は平滑面で、砥石もしくは石皿的な利用をされたものであった可能性がある。

第27図の石鏃はいわゆる鋏形鏃で、黒曜石の横長の剝片を素材とするものである。

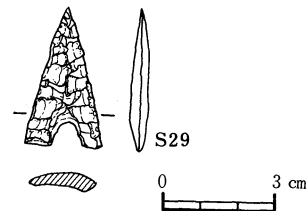
第28図に示した土器のうち121・124・126・130・133の土器は、文様・胎土・焼成等からみて同一個体と思われる。胴部下半の破片は出土していないが、ややふくらんだ胴は頸部でややすぼまり、頸部から口縁部にかけて外反し、肥厚する口縁部は、若干波状を呈するのではないかと思える。器面調整は内・外面ともていねいな撫調整で、特に内面はヘラ磨に近いようなていねいさである。胎土には輝石が多く含まれ、石英・長石等も見られる。焼成はかなり良好で、赤褐色の器壁を呈している。文様は口縁部の肥厚帯とそれ以下胴部までに及ぶ部分で異なっている。肥厚帯には単純な縄文が施されているが、頸部から胴部にかけては、一端に結節をもつ短い縄をころがした縄文が施されている。

この土器は平椀式土器の範疇にはいるものと思われる。

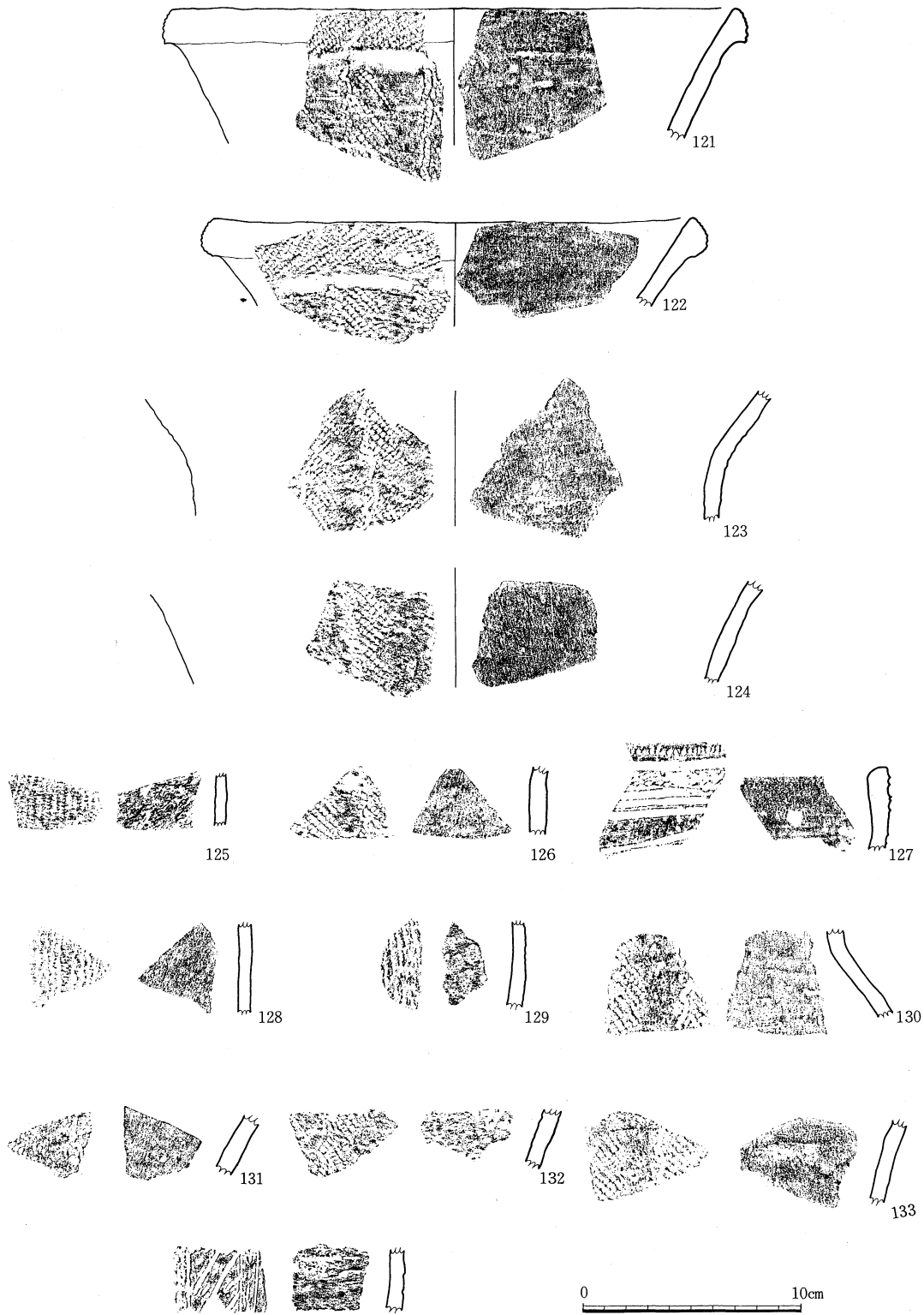
125・127～129・131・132・134は塞之神式土器の範疇にはいると思われる土器である。127は口唇部に刻がはいり、幾何学文が施されている。125・128・129は燃糸文が縦に施文されている。



第26図 白木原遺跡第1トレンチ遺物出土状況・土層図



第27図 白木原遺跡第1トレンチ出土石鏃



第28図 白木原遺跡出土土器

第4節 小結

1. 立地について

他の多くの縄文時代早期の遺跡と同様に、この遺跡もまた、台地奥部の浅い谷の谷頭近くに立地しており、該期のいわゆるベースキャンプ的遺跡として捉えることができると思われる。

台地の他の部分の現況は開墾等により削平をうけており、旧地形を推定することは困難であり、また台地先端部まで遺跡が拡っていたかどうかともわからない。

2. 出土遺物について

ここで出土した土器は平椀式の範疇にはいると判断されるが、再度その点を確認したい。出土した破片から推定される器形は、肥厚帯を持つ口縁はゆるやかな波状を呈し、頸部から口縁部にかけては外反し、胴部は若干ふくらむものである。文様は縄文のみであるが、肥厚帯には単純な縄文、口縁以下には、一端に結節をもつ短い縄文が縦に施文されている。

このような器形・施文を持つ土器形式は縄文時代早期という時期では平椀式の範疇にもっとも近いと思われる。

なお、この土器とまったく同一の特徴を持つものは、国分市上野原遺跡LOC・9でも出土しており、ここでは、刻を有する突帯で区画された幾何学文をもつ平椀式と相伴している。

この土器の特徴は時間的変化の枠内で捉えられるのか、それとも地域的変化の枠内で捉えられるのか興味を持たれるところであるが、これは今後の類例の増加に期待したい。

最後に石鏃の製作技法について一言触れておきたい。通常みられる鋏形鏃は、抉りの部分が最終的に剥離されるが、この遺跡で出土したたった一点の石鏃は、抉りのあとに両側縁が剥離されている。この制作技術はこの遺跡を残した集団に特有のものであるかもしれない。今後の他の遺跡の調査で、この技術伝統を有する遺物の出現に期待が持たれる。

あとがきにかえて

山芋の葉が色づき、山ぶどうがうれ、イノシシ猟等がはじまる時期に今回の調査は始まった。まさしく実りの秋の中で、縄文時代もかくも豊かな実りであったろうと思いがらの調査であった。われわれ両名が調査の実施からまがりなりにも報告書の作成を成しえたのは、発掘作業に従事していただいた方と、重富収蔵庫で整理作業に従事していただいた方の協力の賜物である。ここに記して謝意を表したい。

発掘作業員 浜平民子、山下重盛、藤崎安雄、春口峯次、春口フミエ、森村和裕
森村いち子、杉田千鶴子、駒水竹子、徳田光子、地頭蘭つるみ、海老原ノリ
赤瀬川ふみか、平田洋子、上原ミカ、知覧秀子、知覧サエ、村岡トシ子
永田トミ子、福元カズエ、村留勝代、樽野次子、重森サキエ
小山克子、小久保和代、細川ハツ子

整理作業員 河野陽子、徳永美喜子、山下治子、山口富子、喜入カツエ、有留瑛美

また教育庁文化課の同僚諸氏にも貴重なアドバイスを頂いた。記して謝意を表する。

版 图



飛渡遺跡第5トレンチ遺物出土状況



飛渡遺跡第5トレンチ拡張区全景（北から）



飛渡遺跡5トレ拡張区全景（南から）



飛渡遺跡5トレ拡張区発掘風景（北東から）



飛渡遺跡遺物出土狀態（土器 1.2）



飛渡遺跡遺物出土狀態



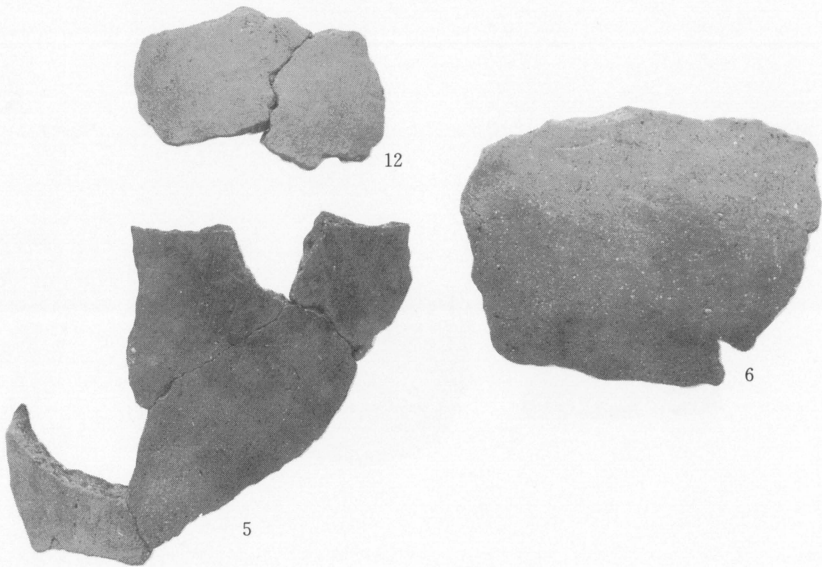
飛渡遺跡出土遺物



飛渡遺跡出土遺物



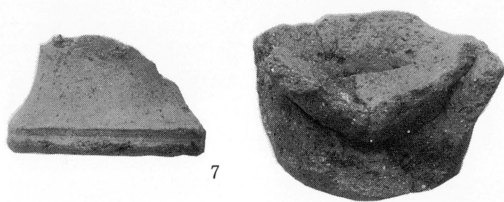
飛渡遺跡出土遺物



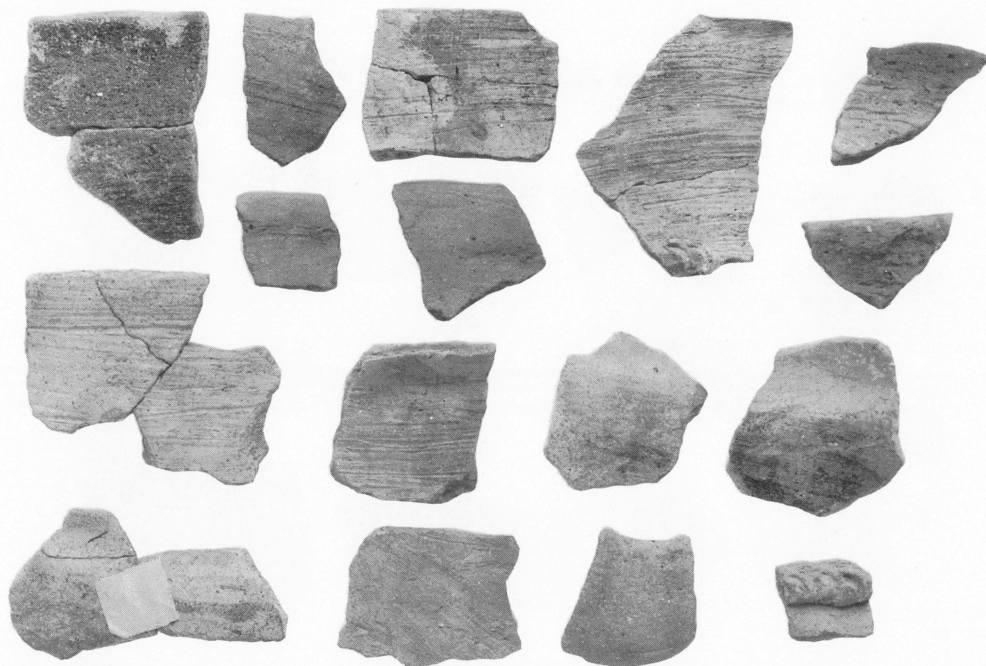
飛渡遺跡出土遺物



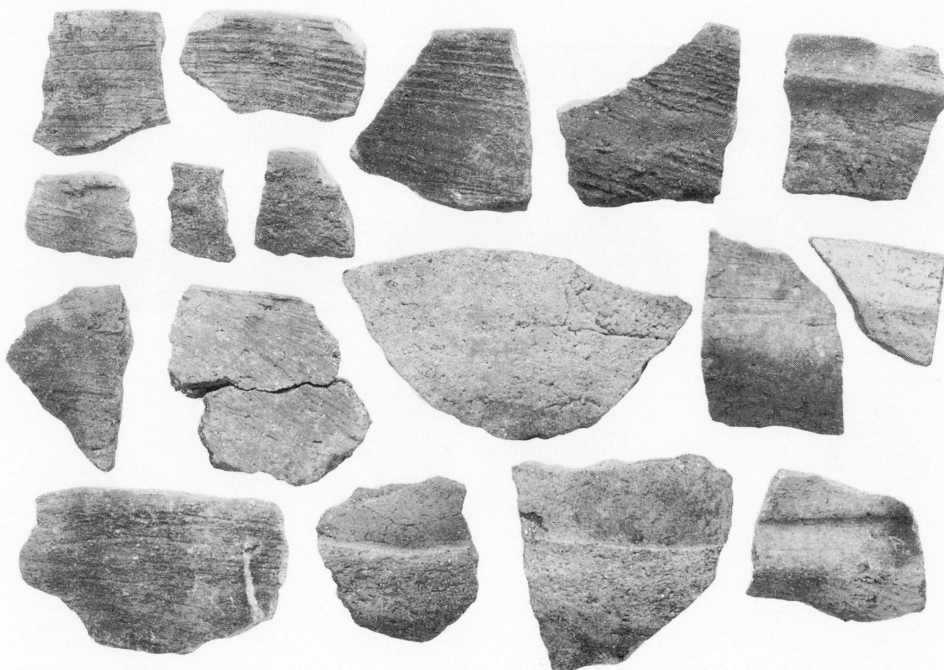
飛渡遺跡出土遺物



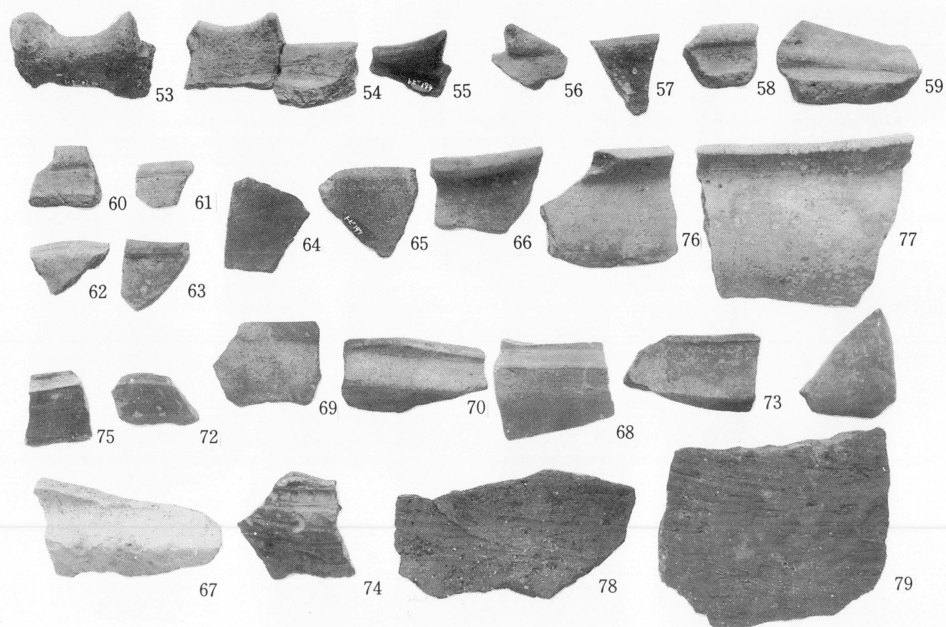
飛渡遺跡出土遺物



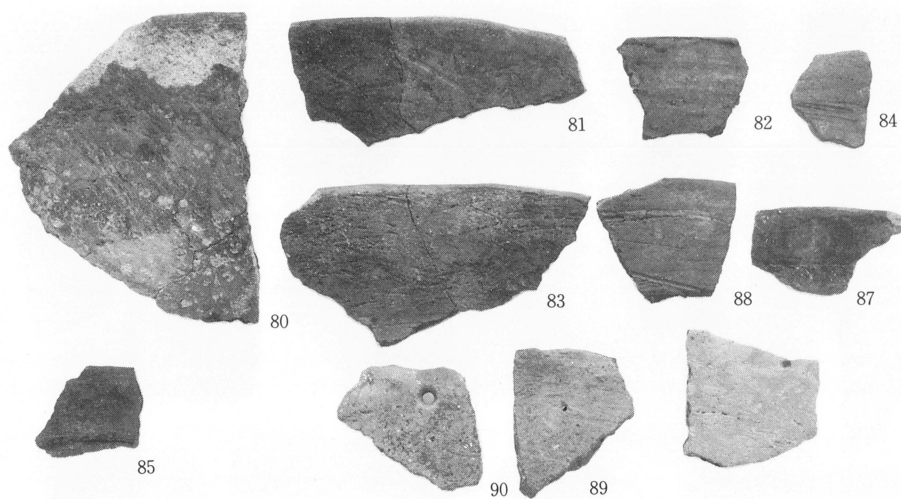
飛渡遺跡出土遺物



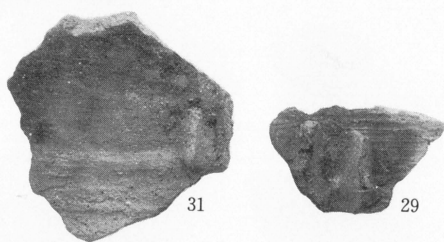
飛渡遺跡出土遺物



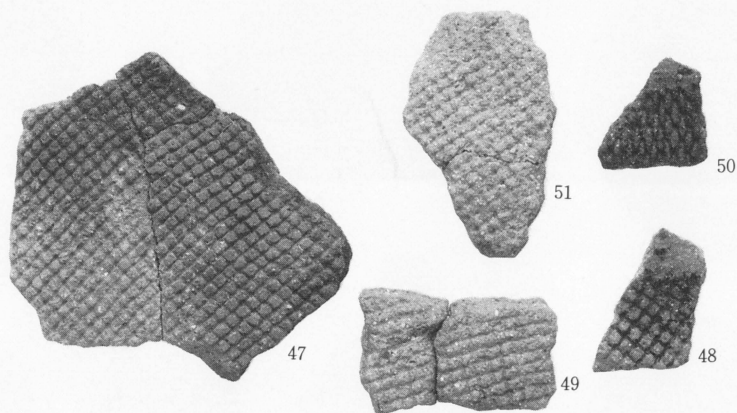
飛渡遺跡出土遺物



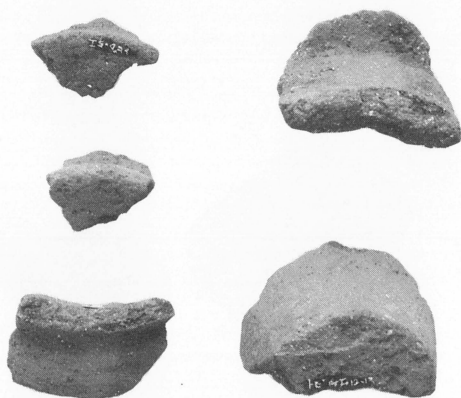
飛渡遺跡出土遺物



飛渡遺跡出土遺物



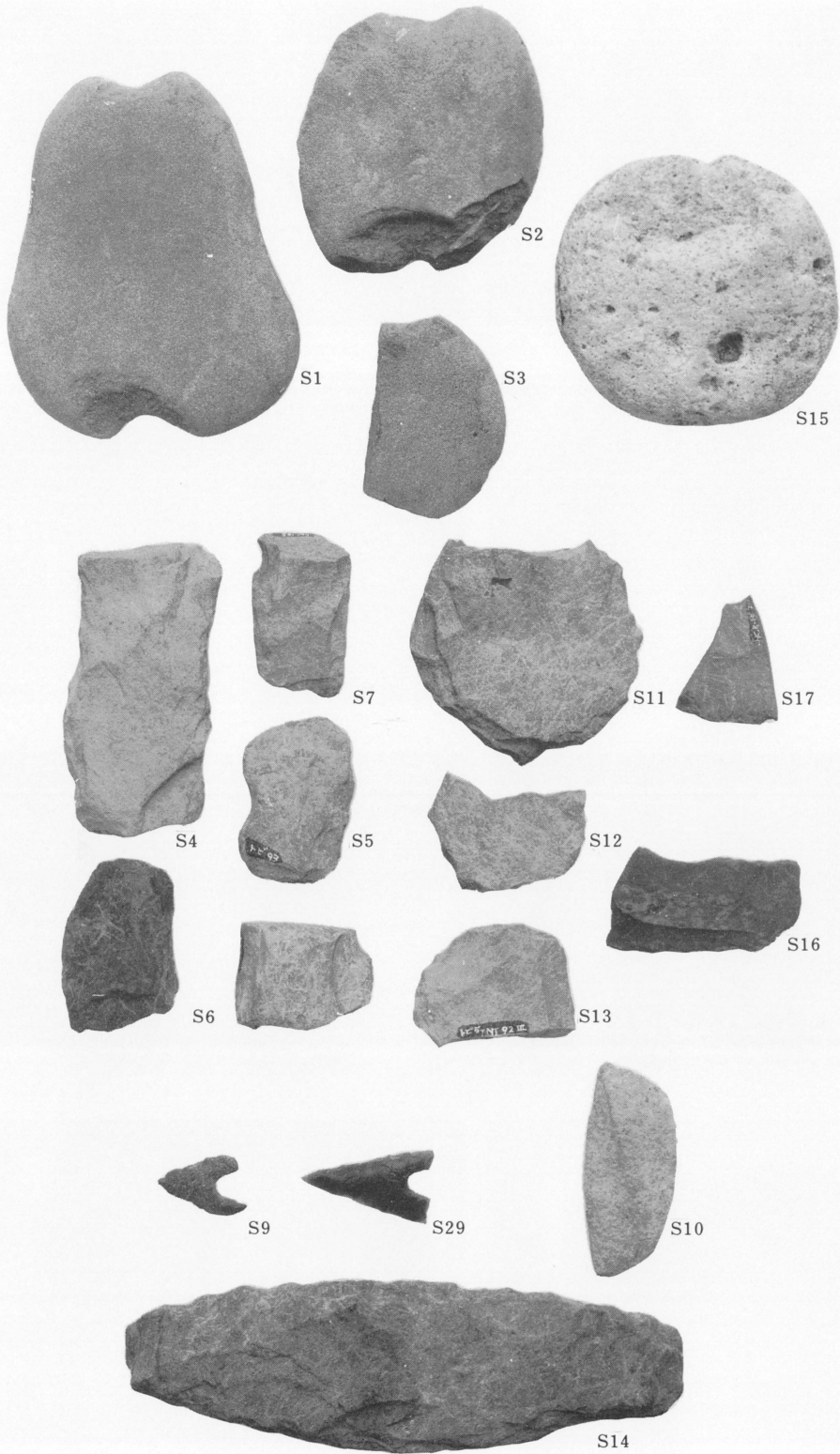
飛渡遺跡出土遺物



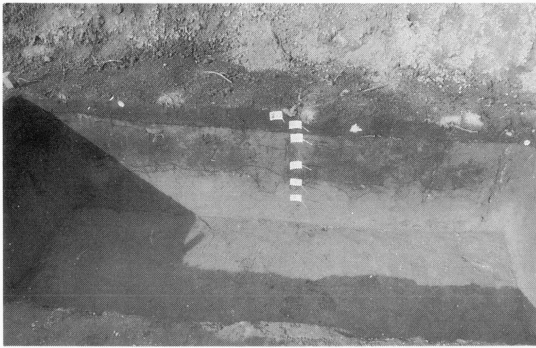
飛渡遺跡出土遺物



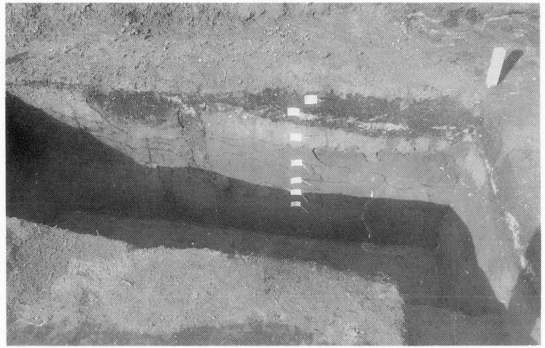
飛渡遺跡出土遺物



飛渡遺跡出土遺物



2トレンチ



1トレンチ



9トレンチ



18トレンチ



19トレンチ



20トレンチ



15トレンチ



23トレンチ

土層断図及び遺物出土状況

(飛渡遺跡 1,2,9トレンチ
島廻遺跡 15,18,19,20,23トレンチ)



13トレンチ



15トレンチ



16トレンチ



17トレンチ



22トレンチ



25トレンチ



26トレンチ



27トレンチ

島廻遺跡土層断面

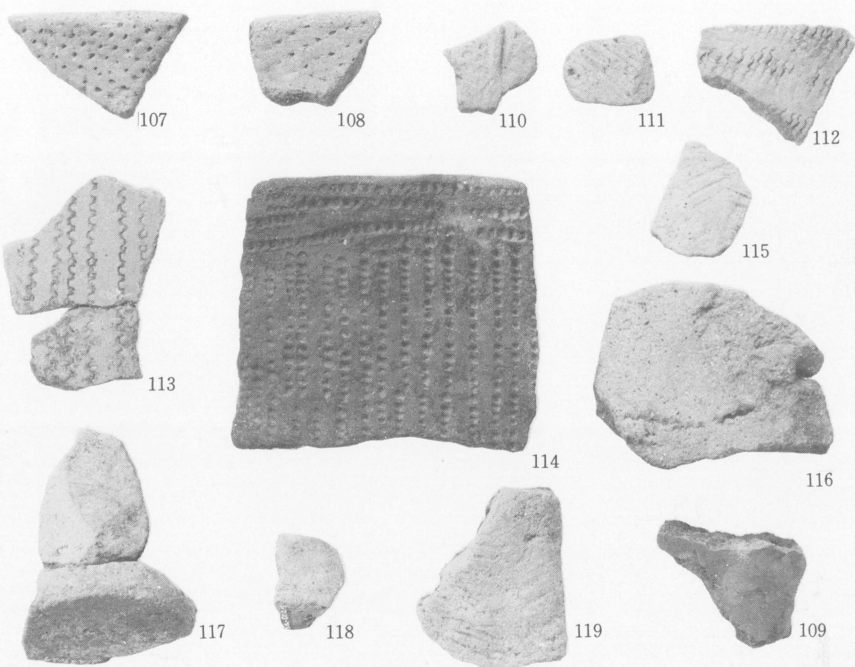


18トレンチ

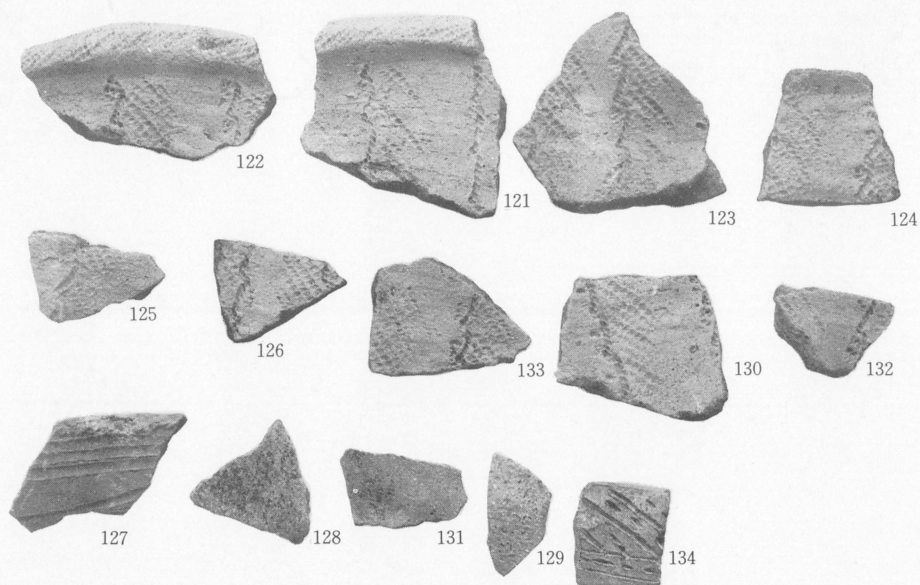


島廻遺跡遺物出土状況

23トレンチ



島廻遺跡出土土器



白木原遺跡出土土器



白木原遺跡発掘状況



白木原遺跡遺物出土状況

志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書 (13)

発行日 昭和63年3月

発行 志布志町教育委員会

☎899 - 71 鹿児島県曾於郡志布志町志布志2542

TEL 0994 - 72 - 1111

印刷 (有)志布志新生社印刷

☎899 - 71 鹿児島県曾於郡志布志町志布志3223-7

TEL 0994 - 72 - 2422